

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

平成 25 年度～平成 29 年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」 研究成果報告書概要

- 1 学校法人名 東洋大学 2 大学名 東洋大学
- 3 研究組織名 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター
- 4 プロジェクト所在地 東洋大学白山キャンパス(〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20)
- 5 研究プロジェクト名 社会的逆境後の精神的回復・成長をもたらす個人的および社会的資源
- 6 研究観点 研究拠点を形成する研究

7 研究代表者

研究代表者名	所属部局名	職名
安藤 清志	東洋大学社会学部	教授

- 8 プロジェクト参加研究者数 23 名

- 9 該当審査区分 理工・情報 生物・医歯 人文・社会

10 研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
安藤清志	東洋大学社会学部教授	総括・社会的逆境からの回復・成長に関する質的研究	個別事例による回復・成長資源の抽出
大島 尚	東洋大学社会学部教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関する認知的変容の分析	回復・成長モデルにおける認知的資源の検討
堀毛一也	東洋大学社会学部教授	社会的逆境からの回復・成長に関連する強みとウェル・ビーイングの結びつきの検討	回復・成長モデルに基づく強みとウェル・ビーイングの関連の検討
久保ゆかり	東洋大学社会学部教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関する発達的変容の分析	回復・成長モデルにおける発達の資源の検討
戸梶亜紀彦	東洋大学社会学部教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関する感情的変容の分析	回復・成長モデルにおける感情的資源の検討
西野理子	東洋大学社会学部教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関する家族資源の分析	回復・成長モデルにおける家族資源の検討

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

山本須美子	東洋大学 社会学部 教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関する社会病理的資源の分析	回復・成長モデルにおける社会病理的資源の検討
須田木綿子	東洋大学 社会学部 教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関する社会経済的資源の分析	回復・成長モデルにおける社会経済的資源の検討
加藤 司	東洋大学 社会学部 教授	社会的逆境からの回復・成長に関するストレス要因の分析	個別事例による回復・成長資源の抽出
水野剛也	東洋大学 社会学部 教授	社会的逆境からの回復・成長過程につながる育成メディアの検討	回復・成長モデルに基づく育成メディア構築の検討
小澤康司	立正大学 心理学部 教授	震災被害者の回復・成長に関する質的研究	個別事例による回復・成長資源の抽出
西田公昭	立正大学 心理学部 教授	カルト脱会者の回復・成長に関する質的研究	個別事例による回復・成長資源の抽出
松井 豊	筑波大学 人間総合 科学研究科 教授	震災援助者の回復・成長に関する質的研究	個別事例による回復・成長資源の抽出
大坊郁夫	東京未来 大学 モチ ベーション 行動科学 部 教授	社会的逆境からの回復・成長に関連する強み育成技法の検討	回復・成長モデルに基づく強み育成技法の検討
角山 剛	東京未来 大学 モチ ベーション 行動科学 部 教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関する職場資源の分析	回復・成長モデルにおける職場資源の検討
福岡欣治	川崎医療 福祉大学 医療福祉 学部 教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関するソーシャル・サポートの分析	回復・成長モデルにおけるソーシャル・サポート資源の検討
谷口尚子	慶應義塾 大学大学 院 システ ムデザイン マネジメン ト研究科 准教授	社会的逆境からの回復・成長の促進につながる政治制度の検討	回復・成長モデルに基づく政策提言の検討

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

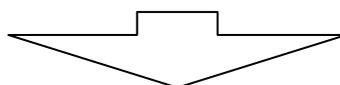
桐生正幸	東洋大学 社会学部 教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関する社会病理的資源の分析	回復・成長モデルにおける社会病理的資源の検討
尾崎由佳	東洋大学 社会学部 准教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関する個人的強みの分析	回復・成長モデルに基づく個人的強みの検討
鈴木規子	東洋大学 社会学部 准教授	社会的逆境からの回復・成長の個別事例による回復・成長資源の分析	個別事例による回復・成長資源の抽出
松田英子	東洋大学 社会学部 教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関するパーソナリティ要因の分析	回復・成長モデルにおけるパーソナリティ要因の検討
山田一成	東洋大学 社会学部 教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関する社会意識の分析	回復・成長モデルにおける社会意識の検討
堀毛裕子	東北学院 大学教養 学部 教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関する強みとウェルビーイングの分析	回復・成長モデルに基づく強みとウェル・ビーイングの関連の検討
(共同研究機関等)			
崔訓碩	成均館大 学校教授	悲嘆の表出に関する日韓比較分析	回復・成長モデルにおける文化的要因の検討
李柱一	翰林大学 校教授	ジャーナリストの惨事ストレスに関する日韓比較分析	回復・成長モデルにおける文化的要因の検討
黄昭淵	江原大学 校教授	近代日本文学作品に見られる社会的逆境の分析	回復・成長モデルにおける文化的要因の検討

<研究者の変更状況(研究代表者を含む)>

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
社会的逆境からの回復・成長に関連する個人的強みの検討	東洋大学社会学部教授	黒沢 香	回復・成長モデルに基づく個人的強みの検討
社会的逆境からの回復・成長過程につながる育成メディアの検討	東洋大学社会学部准教授	関谷直也	回復・成長モデルに基づく育成メディア構築の検討

(変更の時期:平成 26 年 3 月 31 日)



新

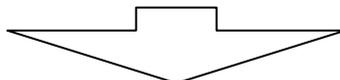
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	退任		

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

旧

プロジェクト外での研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割

(変更の時期:平成 26 年 4 月 1 日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
関西国際大学人間科学部教授	東洋大学社会学部教授	桐生正幸	回復・成長モデルにおける社会病的資源の検討

旧

プロジェクト外での研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割

(変更の時期:平成 26 年 4 月 1 日)



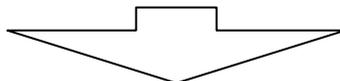
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
東洋大学社会学部准教授	東洋大学社会学部准教授	尾崎由佳	回復・成長モデルに基づく個人的強みの検討

旧

プロジェクト外での研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割

(変更の時期:平成 27 年 4 月 1 日)



新

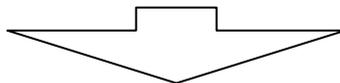
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
東洋大学社会学部准教授	東洋大学社会学部准教授	鈴木規子	個別事例による回復・成長資源の抽出

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割

(変更の時期:平成 27 年 7 月 1 日)



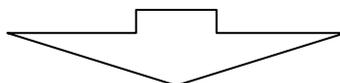
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
東洋大学社会学部教授	東洋大学社会学部教授	松田英子	回復・成長モデルにおけるパーソナリティ要因の検討
東洋大学社会学部教授	東洋大学社会学部教授	山田一成	回復・成長モデルにおける社会意識の検討

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割

(変更の時期:平成 27 年 8 月 1 日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
東北学院大学教養学部教授	東北学院大学教養学部教授	堀毛裕子	回復・成長モデルに基づく強みとウェル・ビーイングの関連の検討

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

11 研究の概要(※ 項目全体を10枚以内で作成)

(1) 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

本プロジェクトは、犯罪被害、被災、死別、病気、離別、経済的困窮など社会と強く関わる個人の経験を広く「社会的逆境」として捉え、こうした問題に対処しようとする人々の精神的回復・成長に焦点をあわせた。具体的には 1)精神的回復・成長をもたらす要因となる個人的・社会的資源の解明、2)それらの資源間の力動的相互関係の検討、3)個人や社会のウェル・ビーイングにつながるプロセスの解明、という3点を課題として研究・実践を行った。その意義は、ネガティブな状態からの回復に焦点をあててきた従来の研究に対し、回復を越えた成長を人間の「強み」ととらえ、その育成につながる資源について、単なる心理主義に陥らず家族やコミュニティなどの社会的資源を重視し、新たな観点から成長のプロセスを解明することにある。そのために散在する知見を集約し、比較文化的な視野も含め広く社会に成果を還元できる包括的な研究拠点の形成を目的とした。逆境の種類としては、最初に実施予定の大規模ネット調査においては、全体的な傾向を把握するために離別や病気、災害な単純な項目ごとの分析や項目間関係に注目して分析を行うが、さらに、個別の逆境について理解を深めるために、オウム真理教など破壊的カルトの被害者や入信過程（過激化）を巡る問題、航空事故遺族の長期的回復過程、フクシマの被災者の分断と欧州に於ける国家帰属による分断の比較研究（ストラスブルなど）、ジェノサイド被害者の回復過程（ルワンダ）なども研究対象とした。さらに、当初は予定していなかったが、松田英子教授が研究員として新たに加わったため、逆境の影響の一側面として同教授の専門である「悪夢」を取り上げて分析の幅を広げることとした。

(2) 研究組織

統括責任者であるセンター長が研究員4名（本学教員）を指名して運営委員会を構成し、議長（センター長）が適宜招集する会議（メール会議を含む）における討議に基づいて研究活動を管理した。研究に際しては、個人研究のほか、各課題を扱う小グループを構成し、グループリーダーの指揮の下に実施した。グループリーダーは運営委員を兼任し、プロジェクト全体の進行を考慮しながらグループの研究活動を調整する役割を担った。グループの研究活動に伴う予算の申請、執行、研究報告に関しては、グループリーダーが責任を負うことになる。また、研究員相互の学術的コミュニケーションを緊密に行うために、適宜、メーリングリスト等を通じて各グループの研究成果について意見交換を行った。PD1名およびRA5名（うち1名は韓国人留学生）には、以上の活動において一定の役割を担わせ、研究活動のノウハウを身につけるように指導した。

各研究グループへは、学内に設置されたセンター事務室において、予算執行の事務手続き、大型プリンタ等の機器利用などに関して適宜、支援をした。韓国の翰林大学応用心理研究所および成均館大学大学院心理学専攻と東京未来大学モチベーション研究所、立正大学心理学研究所との連携については、各研究所・専攻の代表と緊密な連絡をとりながら、共同セミナーの開催や共同研究の実施等についてはテーマに関連した研究員が主たる決定する体制をとった。

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

(3) 研究施設・設備等

本プロジェクトは、東洋大学白山キャンパス2号館 20412 室のセンター事務室を中心に行われた。事務室の面積は 32 m² であり、使用者はプロジェクトに参加する 23 名のほかに、PD1 名、RA5 名の計 29 名であった。センター事務室内には、プロジェクト遂行に必要なパソコン、大型プリンタ、光イメージング脳機能測定装置等を設置、PD または RA を月曜から土曜の 9 時から 18 時の間に常駐させた。これにより、センターの事務、小規模の会議、資料等の作成を常時行えるようになった。講演会等は、白山キャンパス内の教室のうち、予定される参加者数に応じて大教室(300 名規模)または中教室(150 名規模)を借用して実施した。また、国内の心理学関係の学会(日本心理学会、日本社会心理学会、日本グループ・ダイナミクス学会、日本パーソナリティ心理学会など)や国際学会(国際心理学会議など)、各種研究会(社会行動研究会、社会心理学研究会など)において積極的に個別発表、シンポジウムなどを主催、共催し、それぞれの大会等が実施された大学やコンベンションセンターを効率的に利用した。

(4) 研究成果の概要 ※下記、13及び14に対応する成果には下線及び*を付すこと。

5年間にわたる活動成果の概要を、以下の6つのパートに分けてまとめる

1. 社会的逆境に関する大規模調査

プロジェクトが開始された平成 25 年度には、主要な活動として社会的逆境の実態を把握するための大規模な web 調査を 2 回実施した。第 1 調査では、日本人を対象に逆境の種類、立ち直りの程度等について 12,360 名から回答を求めた。第 2 調査では、第 1 調査で何らかの逆境経験があると回答した回答者の中から、20 代から 60 代までの男女 4,120 名を対象にして、社会的逆境についてより詳細に尋ねるものであった。この調査では、10,000 人を越える 20 代~60 代の男女を対象にして、さまざまな種類の社会的逆境が及ぼす心理的影響や立ち直りの程度などが多角的に測定された。得られたデータは、年齢・性別などさまざまな要因が立ち直りの様相に及ぼす影響について分析を進めてきた。また、平成 26 年度には、社会的逆境の種別として、家庭内不和および介護・看護経験者に関する調査、平成 27 年度には経済的逆境の経験者、平成 28 年度には喪失体験(死別・離別)の経験者を対象とした調査を行った。これらの調査結果に関しては、年報や心理学関係の学会で逐次発表を行ってきた(論文 *44, *119, 学会 *43, *55, *56, *64, *65, *99, *101, *113, *114, *121, *122)。現在、調査データについてさまざまな観点から分析を引き続き実施しているが、経験時期によって、精神的回復に有用な資源が、初期には社会的資源、回復期には個人的資源、成長期には強み・長所と変化していくことなど興味深い知見が得られている(論文 *1, 学会 *12, *14, *15)。なお、調査の拡張(文化比較など)に関連した結果は、以下の各セクションで述べる。本調査は、回復を促進する介入研究の基礎的資料として利用することを一つの目的としており、この点でプロジェクトの目標達成は順調に進められたといえる。また、これらの調査を通じ、個人的資源や社会的資源や、ウェル・ビーイングにつながるさまざまな指標の標準化の作業に相当する基礎的資料を得たので、これらを今後の研究に活用できることになった。

2. 逆境調査の拡張

社会的逆境調査は日本人を対象として実施されたが、その後、研究協力協定を結んで

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

いる韓国翰林大学心理学研究所の協力を得て、韓国の中高年の男女を対象として同様の調査を実施した(学会 *55)。具体的には、50～60 代の韓国人(男 366 名、女 368 名、計 734 名)を対象に、日本で実施された調査と同じ質問内容を韓国語に翻訳して web 調査を行った。このデータを、既に実施されている第 2 調査で対象となった 50～60 代の日本人回答者のデータと比較検討した。その結果、経験した逆境の種類として、社会的逆境経験の実態および心的外傷後ストレス障害等の日韓比較を行った。その結果、17 種類の社会的逆境の選択率を比べると、日本人では「親しい人との死別」の選択率が約 4 割を占め、「親しい人との離別」、「自分自身の病気・体調不良」、「家族や親しい人の病気及び怪我」が続いた。一方、韓国人では「借金および経済的困難」の選択率が最も高く(約 20%)、「親しい人との死別」、「家族の不和・対立」、「親しい人との離別」、「失業やリストラ」が続いた。このような日韓の選択パターンの相違は、日本人の中高年の場合には関係の喪失に関わる項目の選択率が韓国人に比べて高いことを示している。一方、韓国人の場合は経済的問題が社会的逆境の中核にあり、それが「家族の不和・対立」、「仕事、勉学上の失敗」、「失業やリストラ」の選択率の高さに影響していることが推測された。ただし、「親しい人の死別」の選択率の中で 2 位を占めていることや、「親しい人との離別」や「家族や親しい人の病気及び怪我」が日本人より若干選択率が高いことから考えると、「日本人は関係喪失に、韓国人は経済的困窮に重きをおく」ということではなく、双方の中高年が置かれた客観的な経済状況の違い(=韓国の中高年が置かれた経済状況の厳しさ)の影響と解釈された。調査対象者があげる社会的逆境の種類が大きく異なることや利用される心理的・社会的資源に違いが認められるなど、文化比較を行うことによって社会的逆境の影響を多面的に理解できることが示唆された。これらの結果は、平成 27 年の韓国心理学会大会において発表された(学会 *42)。

さらに、堀毛を中心に、前述の大規模質問紙調査の展開として、個別の逆境それぞれについて、とくに立ち直るために必要な社会的・個人的有用性の種類を同定するための調査が実施された。具体的には、家庭内不和と介護春護による逆境体験者を対象とした第 3 回調査(2015 年 3 月)、経済的困難経験者を対象とした第 4 回調査(2016 年 2 月)を実施した。死別・離別体験別に第 5 回調査が実施された。核心となる質問項目は、個人的・社会的回復資源の保有度と有用性(個人的資源 18 項目、社会的資源 11 項目、合計 29 項目)であった。得られた結果は多岐にわたるが、個人的資源の項目のうち、「自尊心が高いこと」がいすれの逆境においても有用性の評価が中間点を下回り、精神的回復のためには役に立たないと評価されるという注目すべき結果が得られた。これまで、さまざまな研究において、自尊心が身体的・精神的健康と関連することが指摘されており、一般的に心理的援助の際には自尊心を高めることが重要と考えられてきた。しかし、本調査においては、自尊心が高いことは逆境からの精神的回復にはあまり役に立たない、という人々の認識が確認された(論文 *1)。さらに、「介護看護」体験からの精神的回復に有用と評価された個人的資源の中で、「体力・経済力」に加えて「打ち込める趣味や仕事があること」、「楽観的に考えて感情をコントロールすること」などが上げられるという興味深い結果が得られた。これは、社

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

会的資源のうち「地域の人たちとの一体感があること」「多様な社会的活動（ボランティアなど）に従事していること」「やりがいのある社会的活動に参加していること」の項目について 4.0 以上の評価が示されたのが介護看護のみであったこととも関連させて理解することができる。介護看護においては、ケアの対象となる相手に目を向ける必要性から、とすれば心理的にも物理的にも家庭内に閉じこもりがちになるが、自分の趣味を持つことや地域との一体感を持ち社会的活動へ参加することなど、介護看護のみの世界に閉ざされるのではなく、自分自身の楽しみを持ち、他者との交流を持って社会に開かれた生活を営むことが、精神的回復に重要な意味を持つことが示唆されたと考えられる。以上のように、プロジェクト当初に実施された大規模調査の結果に基づき、後続の調査をさらに実施することによって、個別の逆境事象における資源の有用性に関して実践に直接結びつく結果が明らかにされた。

3. 社会的逆境の種類

これまでさまざまな種類の社会的逆境を扱ってきたが、平成 26 年度より新たなメンバーが加わったことにより、社会的逆境の一つであるカルト被害を扱うことが可能となった。近年、カルト的団体が高校生にまで対象を広げて勧誘を行っており、その被害が深刻化している。こうした状況に鑑み、本センターでは平成 27 年度にはカルト被害者とその家族を支援するフランスの団体“Union nationale des associations de défense des familles et de l'individu” (UNADFI)の代表 C. ピカール氏を招いて講演会を開催（シンポ*13）し、カルト被害を防ぐための社会的資源について情報交換をおこなった。さらに、高校生の被勧誘状況を明らかにするための Web 調査を実施し、今後の研究および実践の足がかりを作った。西田公昭客員研究員は、昨年フランスで開催された国際カルト研究学会（International Cultic Studies Association：ICSA）に参加、「元カルトメンバーの心理的回復過程」と題する発表をおこなった。特殊な学会ではあるが、メンバーがこうした学会に参加することによって最新の研究動向を知ることが出来た。具体的には、カルトメンバーが心理操作によって次第に過激になるプロセス“radicalization”（過激化）に注目が集まっていることが明らかになった。本センターの活動との関連でいえば、主として若者が次第に反社会的行為に手を染め自らを「逆境」に貶めるプロセスであり、こうした心理操作に対する影響の受けやすさを探求することは、自然災害や事故等の被災者・被害者のレジリエンスを理解するうえできわめて有用である。また、平成 26 年にフェリス女学院大学緑園キャンパスで開催された日本社会心理学会第 58 回公開シンポジウムでは、「カルト問題とマインド・コントロール論再考—今なお幻想の彼方へ惹かれる若者たち」がテーマとされた。このシンポジウムでは西田公昭氏がマインド・コントロールのプロセスと信者の脱会、精神的回復の困難さについて話題提供を行い、他の 3 名の話題提供も含めて安藤が全体討論をおこなった（学会 *103）。近年、カルト問題は若者にとっての「逆境」を生み出す事象としてその予防や脱会者へのサポートが検討されるだけでなく、前述の過激化のプロセスの問題がテロリズムへの対処に関連させて研究・議論されるようになり、現実の社会的問題への対処としての重要性に加えて、さまざまな種類の逆境の一つとして検討することの重要性が認識されてきた。

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

その点で、カルト問題を本センターの研究対象に加えたことは大きな意義があった。カルト問題に関しては、これとは別に客員研究員の松井豊教授らがオウム真理教によるサリン事件の被害者に対する調査を実施した(論文 *25,*41,*73)。具体的には、オウム真理教犯罪被害者支援機構が把握している同事件の被害者および家族 953 名を対象に質問紙調査が実施された。調査時期は 2014 年 10~12 月であるので、事件からほぼ 20 年が経過した時点で実施されたこととなる。有効回答は 317 名について分析を加えた結果、PTSD 関連症状は、年齢が高いほど、マスコミの取材を受けた人ほど、身体症状がある人ほど、生活の変化がある人ほど、人間関係の問題がある人ほど、症状が高いことが明らかになった。事件直後の経験はその後の身体症状や生活の質を悪化させ、PTSD 関連症状を維持させていたことから、健康不安の払拭が PTSD 関連症状改善につながる可能性が示唆された。

本プロジェクトでは、ジャーナリストの惨事ストレスも扱われた。社会には、ジャーナリストは精神的にタフであるというステレオタイプが存在するため、ジャーナリスト自身もそれを受け入れて「セルフスティグマ」が形成されることがある。こうしたジャーナリストが被災地で取材活動を行う場合、自身が受けるトラウマ的ストレスを受容できずに精神的ダメージが引き起こされることがある。こうした観点から、研究員の松井と安藤はこれまで日本のジャーナリストに対して面接調査や質問紙調査を実施してきた。今回 5 年間のプロジェクトの中ではその延長として韓国のジャーナリストに対して同様に面接調査と質問紙調査を実施した(学会 *129)。

こうしたジャーナリストの惨事ストレス調査の延長として、自然災害では自治体職員も同様に過剰なストレスに晒されることが知られている。こうした関心に基づいて、メンバーの安藤は横浜国立大学の井上果子教授とともに、第 31 回国際心理学会議(2016 年 7 月 25 日~29 日)において、招待シンポジウムの一つ(HIRC21 と共催)として「自然災害における職務関連ストレス」と題するシンポジウムを企画した(シンポ *5)。東日本大震災など大規模な自然災害においては、被災地域の住民だけでなく、消防士や自衛隊員など救援にあたる人々、取材にあたる報道関係者、自らが被災者でありながら職務を遂行する自治体職員も大きなストレスにさらされる。したがって、長期にわたる復旧・復興のプロセスを円滑に進めるには、こうした人々のメンタルヘルスに注目して適切に対処することが重要な意味をもつ。このような問題意識に立ち、シンポジウムでは臨床心理士(堀毛裕子氏)、自治体職員(高橋尚也氏)、ジャーナリスト(Cait McMahon 氏)の 3 つの職業を取り上げ、災害時における職務遂行の特徴やストレス反応、それらへの対処や予防について話題提供、ディスカッションをおこなった。米・豪の研究者と日本の研究者がともに災害時の職務関連ストレスについて議論する場が提供されたことで、災害時に職業従事者をめぐる同僚間の信頼や他者との信頼関係をどのように構築・維持していくかが重要であること、そして災害時特有の倫理的配慮が重要であることを共有できた。

以上のように、当初から計画されていたものに加えて、新たな研究員が加わることによって社会的逆境の種類や扱う側面の多様性が高まった。これによって、社会的逆境に伴う心理的变化や回復に関する比較検討が新たな視点から行われるようになった。

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

4. 若手研究者の育成

本プロジェクトは、もともと若手研究者の育成を一つの柱としていたが、この点に関して外部評価委員よりさらなる強化が必要であることが指摘された。これを受けて、平成 26 年度には日本グループ・ダイナミクス学会の年次大会（東洋大学）において日韓若手研究者共同セミナー（シンポ *16）を開催、本プロジェクトに関わる東洋大学および成均館大学の大学院生が活発な議論をおこなった。この共同セミナーの成功を受けて、両大学の大学院生が共同研究を計画・実施するプランが了承され、大学院生を中心に2回の研究ミーティング等を経て2つの実証研究が実施された。こうした研究の成果は平成 28 年度 7 月に開催された国際心理学会議 (ICP2016) のテーマセッション（シンポ *6）において発表、議論された。このシンポジウムは鷹阪龍太（HIRC21 RA）と徐正吉（成均館大学）が企画し、「社会的排斥経験後の否定的感情の変化」をテーマに扱った研究チームから金子迪大（HIRC21 RA）と李夏妍（成均館大学）、「悲嘆の表出」をテーマに扱った研究チームから倉矢匠（HIRC21 RA）と陸英善（同）の2名、計4名がそれぞれ実施された共同研究に基づき話題提供を行った。日韓の若手研究者と他の国や地域から訪ずれた研究者が一堂に介して「逆境と文化比較」という大きなテーマについて議論する場が提供されたことで、社会的逆境を巡りいかに多くの普遍的現象が考えられるのか、さらに文化特有の反応や文化間で生じる齟齬に対して注意することの重要性を確認することができた。国際会議終了後も、大学院生の交流は社会的逆境経験者の悲嘆表出に関する日韓比較研究等に発展し、これまで両大学において2回の共同セミナー（シンポ *1, *3 等）が実施された。

成均館大学との研究交流はその後も継続されており、とくに尾崎研究員と日韓大学院生を中心に自己制御をテーマとした共同研究の実施が予定され、テーマの点でも新たな段階に入った。同研究員は、成均館大学側の予算（後述）によって招待を受け、成均館大学において同大学の教員および大学院生に対して後援をおこなった。なお、2名の大学院生が、堀毛研究員の指導のもとで本センターに関わる研究を一部組み込んで学位論文を作成し、平成 29 年度に学位を取得した。以上の成果に関しては、HIRC21 による費用支出と学会を通じた既存のネットワークが大きな役割を果たした。すなわち、HIRC21 のセンター長と成均館大学の崔教授はいずれも日本心理学会、韓国心理学会の国際委員会委員であり、学会間交流の経験を研究センター（および心理学専攻）間の交流によって具体的活動に結びつけたことになる。その際、当初は主として HIRC21 の予算から共同研究に関して多くの予算を支出したが、やがて成均館大学側も HIRC21 と類似の外部予算を獲得し、対等な立場で共同研究を実施することとなった。これは、教員を交えた共同研究によって大学院生のモチベーションが目に見えて向上することに、韓国側の教員が認識するに至ったことによると思われる。この点、試行錯誤ではあったが研究センターを利用した研究者育成の成功例として今後に生かせる貴重な経験となった。

5. 関連領域の研究者との研究交流

本プロジェクトのメンバーは社会心理学や社会福祉学を専門とするが、社会的逆境後の回復・成長を総合的に理解するためには、関連領域の研究者との研究交流が重要な意味をもつ。本センターはプロジェクトの当初より、研究協力協定を締結している組織の

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

メンバーと協力して国際的な比較研究を実施したりシンポジウムを開催したりして、この面での充実をはかってきた。平成 25 年度には研究員 4 名と大学院生 3 名がカナダのブリティッシュコロンビア大学を訪問し、森田療法の世界的権威である石山一舟教授の関係者と共同セミナーを開催した。これがきっかけとなり、平成 26 年度に日本グループ・ダイナミックス学会第 61 回大会（東洋大学）においてブリティッシュコロンビア大学の南昌廣氏を招き、講演会「社会心理学と平和構築—大量虐殺後のルワンダにおける和解と癒しの試み」を開催（シンポ *15）し、極限状況ともいえる社会的逆境からの回復に関する心理的・社会的資源に関して刺激的な交流をおこうことができた。平成 28 年 2 月には、ストラスブール大学のシルマン教授とロウエル教授を招きシンポジウム「分断から統合へ—ストラスブールとフクシマ」を開催（シンポ *12）、独仏への帰属の変更が繰り返されたストラスブールの問題や各国国民の「ヨーロッパ」の知覚に関して、歴史学、政治学、社会学の視点から話題提供をいただいた。これを受けて日本側研究者が原発事故により避難生活を続ける人々の「分断」の現状とコミュニティ「統合」への道筋について話題提供を行い、最後に両者の共通点と相違点を歴史的、文化的、心理学的視点から検討した。さらに、平成 28 年 3 月には韓国江原大学の黄昭淵教授を招き、高浜虚子の著作を通して日本人の朝鮮観および社会的逆境に対する日本的心性について討論（講演会 *1）をおこなった。以上の活動を通じて、社会心理学的な観点に加えて、文化的・歴史的な拡がりの中で社会的逆境の問題を扱う姿勢をメンバー間で共有できるようになった。

さらに、堀毛研究員と RA の金子迪大は、これまでの研究活動を土台にして平成 29 年に日本心理学会「ポジティブ心理学研究会」を立ち上げ、その第 1 回研究会が HIRC21 との共催で開催された（シンポ *2）。公益社団法人日本心理学会公認の研究会であり、今後、この研究会を中心に社会的逆境からの回復の問題を含めポジティブ心理学の多様なテーマに関心をもつ研究者の交流が活発になることが期待されている。なお、具体的には上記 2 名の監訳により“Sheldon, K.M. et al. (Eds.) (2011). *Designing Positive Psychology : Taking Stock and Moving Forward*”の翻訳作業が既に進められている。

6. 方法論の検討

社会的逆境に対する心理的影響をとらえるには自己報告に基づく尺度が使われることが多いが、その弱点を埋め合わせるために異なる方法による測定の必要性が認識された。本プロジェクトでは、新しく加わったメンバーの専門性をいかして二つの方法の使用を検討した。一つは脳機能の測定である。社会的逆境の影響を自己評定法による変化と脳機能の変化を対応づけて検討することによって、回復のプロセスをより精緻に検討することが期待できたので、平成 27 年度に「光イメージング脳機能測定装置」を導入し、これまで桐生研究員を中心に装置使用の習熟度を高めるように努めてきた。これまで実施してきた感情持続や社会的逆境からの回復プロセスの研究において同装置を使用する方向で検討している。

もう一つ、検討を試みてきたのは経験サンプリング法である。経験サンプリング法（経験抽出法）は、日常生活を送っている調査対象者に対し、数日間にわたって 1 日数回、（定刻あるいは無作為な時刻における測定を実施する調査手法であり、生態学的妥当性が確保できると同時にスマートフォンを利用して比較的安価に実施できることもあり、

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

近年注目されている。本プロジェクトでは、平成 26 年にこの方法を用いて優れた研究を実施しているケルン大学の Hofman 教授を招いて講演会を開催した(シンポ *15)。これ以来、とくに尾崎研究員を中心に検討を進め、感情の持続に関する研究で使用された(学会発表 *19)。現在、感情持続の問題に加えて、自己制御に関する介入研究において経験サンプリング法を使用した場合のメリットとデメリットを検討しており、プロジェクト全体の中で有力な研究方法の一つとして定着しつつある。

<優れた成果が上がった点>

まず、優れた成果として、平成 26 年度から 27 年度にかけて実施された大規模ウェブ調査によって、これまで個別に扱われてきたさまざまな種類の社会的逆境について、回復過程に関わる要因を総合的に検討することができた点があげられる。この調査に関しては、これまで各個人およびグループが全期間にわたり調査の一部を学術論文として執筆したり学会で発表したりしてきたが、これら総合的にまとめる必要がある。5 年間のプロジェクトは終了しているが、本年度に限り大学から得ている予算によって「現代人のこころのゆくえ」の別冊として刊行することが計画されている。

ジャーナリストの役割について検討を加えていることも優れた点であると思われる。従来、ジャーナリストに関しては取材時のメディアスクラムのように否定的側面が問題とされることが多かったが、一般社会と被害者・被災者を結ぶ役割を果たす報道内容やジャーナリストの惨事ストレスを検討することは、本プロジェクトの中では回復を促す社会的資源の問題を扱うことになる。最終的な目標である「社会的逆境からの回復のモデル」を構築する上で欠かせない側面であるといえる。前述のように、自然災害など当初予定されていた逆境に加えて、カルト被害者やジェノサイド被害者など、研究が進展するにつれて新たな社会的逆境の研究者と意見を交わす機会が数多く提供された。この点については、今後それぞれの研究者が自らの研究を進展させる上で貴重な経験となった。

さらに、後述のように、拠点形成を意識して活動を継続した結果、研究の広がりという点で研究者や大学院生に大きなメリットがあることが認識され、最終的に社団法人を設置することによって拠点を「サステナブル」なものとする可能性が生み出された。これも大きな成果の一つといえることができる。

<課題となった点>

これまで、国内の 2 つの大学の研究所、海外(韓国)の 2 つの大学の研究所および大学院研究科と協力協定を締結して研究の基盤作りをおこなってきた。将来の研究に資するためのネットワークを形成しその中心に本センターを位置づけることが目的であったが、こうしたネットワークを利用した個々の研究は、各研究グループが主体的に進めるため全体としてそれぞれの流れをまとめることが困難となった。本来のプロジェクトの目標から逸れないように、各研究グループ同士が十分な連携をとりながらネットワークを意味ある形で活用することの難しさを感じた。

韓国の 2 つの大学と長期にわたり研究交流を行ったが、4 年前に韓国からの留学生が本学社会学研究科社会心理学専攻に入学したことにより、さまざまな面で交流が格段に活発化した。しかし、事務的連絡も含め留学生にかなりの負担となった面も否めない。難しい問題であるが、大学院生や研究員とは別に、交流先の言語に長けた人材が研究セ

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

ンターあるいは大学の別の部署に配置されていることが望まれる。

<自己評価の実施結果と対応状況>

自己評価は、年度末に実施される外部評価委員会に先立ち、通常行われる幹事会の中で実施している。外部評価委員会においては予算執行状況および1年間の活動実績を詳細に説明することになっているため、幹事会メンバーが事前にパワーポイントによる発表資料を作成する。この段階で一年間の活動の自己評価が可能であり、当該年度の目標に照らしてどの程度達成しているかを評価してきた。最終年度に関しては、予算執行が比較的順調に推移した点が評価された。また、外部評価委員会開催後の幹事会においては、3名の委員の評価について議論する中で、自己評価とのズレやその原因について理解を深め、次年度の活動のあり方を検討した。最終年度に関しては、プロジェクト終了後の方向性に関して評価委員から受けたアドバイスに対応してさらに幹事会で検討を加え、後述のように一般社団法人の設置という結論に達した。

<外部（第三者）評価の実施結果と対応状況>

各年度の最終月に第三者評価委員会を開催した。委員会においては3名の委員（学外2名、学内1名）に対してセンター長が当該年度の活動状況および予算の支出状況を報告、各委員に意見を求めた。

3名の委員（学内1名、学外2名）から成る外部評価委員会を設置し、各年度末に評価委員会を開催している。委員会では、センター長および事務局長から当該年度の活動実績および予算執行状況について説明を行った後、質疑応答を経て、最後に評価書への記入を求めることにしている。この評価に基づき、幹事会において問題点等を検討、次年度に向けて必要な修正を行っている。これまで、概ね肯定的な評価を受けているが、平成26年度の評価において大学院生(RA)の指導をさらに強力に進める必要があるとの指摘を受け、研究協力協定を締結している韓国成均館大学の大学院生（社会心理学専攻）との共同研究実施をサポートした結果、研究成果を来年度国際学会で発表し、さらに共同研究を企画するなど研究者としての成長を見ることができた。平成27年度末に行われた評価委員会では、大学院生も含め海外との研究交流が充実してきたことが高く評価され、今後とも、研究交流に必要な予算を十分に確保すべきとの指摘を受けた。これを受けて、28, 29年度は各研究グループに海外研究者との研究交流を進めるように促すとともに、国際学会等で積極的に成果を発表した。

以上のように、HIRC21が15年にわたり継続したことにより、評価委員も長年にわたり本センターの活動に接することになった。そのため、評価委員にはセンター側の意図を十分に理解していただき、きわめて適切かつ建設的な意見を数々受けることができた。

<研究期間終了後の展望>

研究期間の前半においては、本センターのプロジェクトのさまざまな面に関連する海外（韓国、カナダ、フランス、ドイツ）の研究者を招いて研究交流を行った。物理的な研究拠点というよりも、本センターを中心とした人的ネットワークを構成するという意味での「拠点」であり、研究期間の後半においては、こうしたネットワークを活用して各グループの研究を深めることができた。当初の目標である、「社会的逆境の心理的・社会的資源に関するモデルを構築する」という当初の目標については、ようやく介入研

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

究に着手して予備的な分析を行った時点に留まっているので、今後、さらに研究を進める予定である。また、ジャーナリストの惨事ストレス研究に関しては、韓国の研究者との共同研究を軸に、被災者、一般市民、ジャーナリストの相互関係を明らかにする方向に研究を展開させることができたので、当初の目的にあるように、異なる被災・被害状況にある人々の心理やそれを取り巻く社会との関わりを総合的に理解する視点を保ちつつ、今後も研究活動を持続させる予定である。社会的逆境の種類としては、引き続き航空機事故、カルト、原発事故、テロ（地下鉄サリン事件）被害などを対象として短期的、長期的な視点から研究を進めるとともに、その回復に至る基礎的な心理プロセスをさまざまな手法を使って明らかにする予定である。

<研究成果の副次的効果>

これまでの活動は拠点としての体制作りと、方法論の検討も含む基礎的な調査研究を中心としていたため、とくに特定可能な副次的効果はない。ただし、5年間の活動を通じて、「拠点」や「ネットワーク」の重要性を研究員が強く認識・実感するようになったことは、当初予想されなかった副次的効果といえるかもしれない。今年度でプロジェクトは終了になるが、拠点の機能の一部を継続的に担う組織を新たに設置する可能性について外部評価委員の意見も伺いながら幹事会等で議論を重ねた結果、今回のプロジェクトでも研究会活動を通して関与した「社会行動研究会」を一般社団法人とすることで意見が一致した。設立準備も順調に進み、本年4月2日に登記が終了（設立）した。この法人はHIRC21のメンバー4名を含む5名が設立時理事となっており、今後、（一社）社会行動研究会の活動と社会学研究科におけるプロジェクトを戦略的に組み合わせることによって、質・量の両面で優れた研究・実践活動を展開する予定である。

12 キーワード(当該研究内容をよく表していると思われるものを8項目以内で記載してください。)

- (1) 逆境 (2) レジリエンス (3) 災害
 (4) 被害者 (5) 被災者 (6) 回復
 (7) 成長 (8) ストレス

13 研究発表の状況(研究論文等公表状況。印刷中も含む。)

上記、11(4)に記載した研究成果に対応するものには*を付すこと。

<雑誌論文>

1. *堀毛裕子・堀毛一也・安藤清志・大島尚 2018 社会的逆境からの精神的回復と個人的・社会的資源の有用性 東洋大学 21世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報, 15, 3-13. (査読無)
2. 日向 野智子・山極 和佳・藤後 悦子・角山 剛 (2018). 潜在保育士の退職理由と再就職意欲の実態 モチベーション研究, 7, 10-19. (査読無)
3. Kaneko, M., Ozaki, Y., & Horike, K. (in press). Curiosity about a positive or negative event prolongs the duration of emotional experience. Cognition and Emotion, DOI: 10.1080/02699931.2017.1324766 (May, 2017). (査読有)

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

4. 戸梶 亜紀彦 (2017). 看護職における職務動機づけの阻害要因と維持・促進要因に関する検討 現代社会研究 (東洋大学現代社会総合研究所紀要), 14, 27-36. (査読無)
5. 水野 剛也 (2018a). 「新聞 4 コマ漫画が描く菅直人首相 (後編-2) 首相在任期間中の 3 大紙の 4 コマ漫画に関する一分析 2010~2011」 東洋大学社会学部紀要, 55(1), 21-41. (査読無)
6. 水野 剛也 (2018b). 「新聞 4 コマ漫画が描く菅直人首相 (結論) 首相在任期間中の 3 大紙の 4 コマ漫画に関する一分析 2010~2011」 東洋社会学部紀要, 55(2), 5-16. (査読無)
7. Saldaña, O., Rodríguez-Carballeira, A., Almendros, C., & Nishida, K. (2018). Psychological abuse experienced in groups scale: Psychometric properties of the Japanese version. The Japanese Psychological Research, 60, 13-24. (査読有)
8. 谷口 尚子 (2018). 地方自治・地方分権の政治争点化 地方自治法施行 70 周年記念論文集, 総務省自治行政局. (査読無)
9. 戸梶 亜紀彦 (2018). オフィス改革による公務員の職場における意識・行動の変化に関する検討 -愛媛県西予市を事例として- 現代社会研究 (東洋大学現代社会総合研究所紀要), 15, 3-10.
10. Aiba, M., Tachikawa, H., Fukuoka, Y., Lebowitz, A., Shiratori, Y., Doi, N., & Matsui, Y. (2017). Standardization of Brief Inventory of Social Support Exchange Network (BISSEN) in Japan. Psychiatry Research, 253, 364-372. (査読有)
11. 大坊 郁夫 (2017). Well-being を目指すコミュニケーション研究 応用心理学研究, 43, 58-73. (査読有)
12. 大坊 郁夫・小川 一美・藤原 健・朴 喜静・毛 新華 (2017). 対人場面における適切な非言語コミュニケーション研究 モチベーション研究, 6, 49-72. (査読無)
13. 遠藤 真名美・松田 英子・柴田 良一 (2017). Big Five パーソナリティが対人ストレスコーピングに及ぼす影響—認知的評価媒介モデルの検証— 江戸川大学紀要, 27, 335-341. (査読有)
14. Kato, T. (2017a). Effects of coping flexibility on cardiovascular reactivity to task difficulty. Journal of Psychosomatic Research (Elsevier), 95, 1-6. DOI:

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

10.1016/j.jpsychores.2017.02.001. PMID: 28314543 (査読有)

15. Kato, T. (2017b). Effects of flexibility in coping with menstrual pain on depressive symptoms. *Pain Practice* (John Wiley & Sons), 17, 70-77. DOI: 10.1111/papr.12412. PMID: 26895743. (査読有)

16. Kato, T. (2017c). Effects of coping flexibility on cardiovascular reactivity to task difficulty. *Journal of Psychosomatic Research* (Elsevier), 95, 1-6. Doi:10.1016/j.jpsychores.2017.02.001. (査読有)

17. Kato, T. (2017d). Effects of flexibility in coping with menstrual pain on depressive symptoms. *Pain Practice* (John Wiley & Sons), 17, 70-77. DOI:10.1111/papr.12412. PMID: 26895743. (査読有)

18. 川瀬 洋子・松田 英子 (2017). 悪夢と不眠を訴える女子高校生に対するスクールカウンセリングの事例 ストレスマネジメント研究, 13 (1), 32-41. (査読有)

19. 許 倩・松田 英子 (2017a). 睡眠の不調とパーソナリティ特性—日本人大学生と在日中国人留学生の比較— ストレスマネジメント研究, 13 (1), 23-31. (査読有)

20. 許 倩・松田 英子 (2017b). 在日中国人留学生の異文化適応を促進・抑制する要因 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報, 14, 55-59. (査読無)

21. 久保 ゆかり (2017). 葛藤する感情をことばにすることの発達—精神的成長を支える「感情語り」の始まり— 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報, 14, 9-14. (査読無)

22. 松田 英子 (2017a). 不眠と悪夢に関する短期認知行動療法に関する実験的検討 ストレスマネジメント研究, 13 (1), 17-21. (査読有)

23. 松田 英子 (2017b). 夢はどうやって作られるのか—記憶と睡眠障害のメカニズム α -Synodos, 221, 34-43. (査読無)

24. 松井 豊 (2017). 凄惨な現場を経験した消防職員のメンタルヘルスについて プレホスピタル・ケア, 30 (1), 27-31. (査読無)

25. *松井 豊・藤田 浩之・小林 麻衣子・高橋 幸子・仲嶺 真 (2017). 地下鉄サリン事件被害者・家族の心理—社会心理学研究会開催報告— 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報, 14, 89-94. (査読無)

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

26. Matsuo, A., Takahashi, N., & Matsui, Y. (2017). Classification of social stereotypes by Japanese social psychologists, 筑波大学心理学研究, 53, 51-62. (査読有)
27. 西野 理子 (2017). 三十代への移行：働くことの意味を探して、「失われた十年」を生きる 変容する社会と社会学—家族・ライフコース・地域社会 177-197. (査読無)
28. 岡田 斉・松田 英子 (2017). 悪夢の生起メカニズムと支援に関する心理学的研究の動向 ストレスマネジメント研究, 13 (1), 11-16. (査読有)
29. Ozaki, Y., Goto, T., Kobayashi, M., & Hofmann, W. (2017). Counteractive control over temptations: Promoting resistance through enhanced perception of conflict and goal value, *Self and Identity*, 16 (3), 1-21 (査読有)
30. 須田 木綿子 (2017). 民間サービス供給組織の広域化と地方自治体の役割 社会政策学, 9(2), 101-112. (査読有)
31. 鈴木 規子 (2017). 解題と概要 (Roland Pfefferkorn, L'entrée des femmes dans les universités européennes: France, Suisse et Allemagne) フランス教育学会紀要, 29, 104-106. (査読無)
32. 鈴木 規子・シルヴァン シルマン・ジェイ ローウェル (2017). 「ヨーロッパのレジリエンス—歴史・現在」講演録—解説付き 日仏政治研究, 11, 37-48. (査読無)
33. 戸梶 亜紀彦 (2017). 職場の人間関係に基づいた若年層のレジリエンス向上策について 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インターラクション・リサーチ・センター年報, 14, 3-8. (査読無)
34. 月田 有香・高嶋 和毅・横山 ひとみ・市野 順子・伊藤 雄一・大坊 郁夫・北村 喜文 (2017). コミュニケーショントレーニングが集団討論場面に与える影響 ～ 即興劇 (インプロ) の有無の比較を通して ～ 電子情報通信学会技術研究報告, 116 (524), 143-148. (査読有)
35. 和田 迪子・渡辺 麻美・市村 美帆・松井 豊 (2017). Web 調査による新しいエゴグラムの尺度開発 筑波大学心理学研究, 53, 63-72. (査読有)
36. 山本 須美子 (2017a). 在欧文氏一族にみる宗族のつながりの世代的変容 東洋大学社会学部紀要, 54 (1), 21-40. (査読無)

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

37. 山本 須美子 (2017b). 在日インド人家族の学校選択を通してみたトランスナショナルリズム 東洋大学アジア文化研究所年報, 51. (査読無)
38. 兪 善英・古村 健太郎・松井 豊・丸山 晋 (2017). 東日本大震災被災地に派遣された消防職員のストレス症状と外傷後成長 心理学研究, 87, 644-650. (査読有)
39. 吉野 美緒・重村 朋子・高田 治樹・市村 美帆・稲本 絵里・川尻 泰樹・増野 智彦・松井 豊・横田 裕行 (2017). 病院前救急診療活動に従事する医師の外傷性ストレスに関する研究 ト라우マティック・ストレス, 14, 63-72. (査読有)
40. 大坊 郁夫 (2016) 街中の歴史的な実用美 心理学ワールド, 74, 4 (査読無)
41. *藤田 浩之・高橋 幸子・仲嶺 真・小林 麻衣子・松井 豊 (2016). 地下鉄サリン事件における被害者の身体および精神症状-事件から 20 年の変化- 筑波大学心理学研究, 52, 77-84. (査読有)
42. Fujiwara, K. & Daibo, I. (2016). Evaluating interpersonal synchrony: Wavelet transform toward an unstructured conversation. *Frontiers in Psychology (Methods)*, 7, Article 516, 1-9 (査読有)
43. 哈 布日・高橋 幸子・三浦 絵美・松井 豊 (2016). 日本人大学生および在日留学生の防災行動の規定因の検討 -在日留学生に特有な規定因に注目して- 筑波大学心理学研究, 52, 67-76. (査読有)
44. *堀毛 裕子・堀毛 一也・安藤 清志・大島 尚 (2016). 社会的逆境後の精神的回復・成長につながる資源 (3) -個人的特性と精神的回復・成長- 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクシオン・リサーチ・センター研究年報, 13, 3-13. (査読無)
45. 入山 茂・池間 愛梨・桐生 正幸 (2016). 絞殺死体の司法検視における検視官の遺体情報の評価特徴-アーカイブ分析を用いた事例研究- 犯罪心理学研究, 53 (特別号), 156-157. (査読有)
46. 入山 茂・桐生 正幸 (2016). 日本の国内線定期便のハイジャックにおける目的と凶器の特徴 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクシオン・リサーチ・センター研究年報, 13, 51-53. (査読無)
47. 入山 茂・桐生 正幸 (2016) 遺書の有る事例における心理学的な情報を用いた死因の推定の特徴-遺書に対する態度との関連- 日本法科学技術学会誌, 21 (Supplement), 182. (査読有)

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

48. 柏木 希宇・松田 英子 (2016). 参与観察法による知的障がい者ケアホームにおける利用者のニーズの質的分析 江戸川大学紀要, 26, 43-50. (査読有)
49. Kato, T. (2016a). Relationship between coping flexibility and the risk of depression in Indian adults. *Asian Journal of Psychiatry* (Elsevier), 24, 130-134. DOI: 10.1016/j.ajp.2016.09.008. PMID: 27931896. (査読有)
50. Kato, T. (2016b). Impact of psychological inflexibility on depressive symptoms and sleep difficulty in a Japanese sample. *SpringerPlus* (Springer), 5:712. DOI: 10.1186/s40064-016-2393-0. PMID: 27375981. (査読有)
51. Kato, T. (2016c). Effects of partner forgiveness on romantic break-ups in dating relationships: A longitudinal study. *Personality and Individual Differences* (Elsevier), 95, 185-189. DOI: 10.1016/j.paid.2016.02.050. (査読有)
52. Kato, T. (2016d). Psychological inflexibility and depressive symptoms among Asian English speakers: A study on Indian, Philippine, and Singaporean samples. *Psychiatry Research* (Elsevier), 238, 1-7. DOI: 10.1016/j.psychres.2016.02.007. PMID: 27086203 (査読有)
53. 桐生 正幸 (2016a). 犯罪心理学による悪質クレマーの探索的研究 東洋大学 21世紀ヒューマン・インタラクシオン・リサーチ・センター研究年報, 13, 45-50. (査読無)
54. 桐生 正幸 (2016b). 殺人心理学論考 シリアルキラー展図録, 4-8. (査読無)
55. 紀藤 正樹・桐生 正幸・出口 保行・太刀掛 俊之・田中 真介 (2016). 日本応用心理学会第 82 回大会公開シンポジウム-住みにくい, 生きにくい社会を well-being 社会にする : 共生社会を築く応用心理学の実践- 応用心理学研究, 42(1), 65-91. (査読有)
56. 久保 ゆかり (2016a). 養育者と子どもが感情経験について語ることの発達-自己概念の構築を導く- 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクシオン・リサーチ・センター研究年報, 13, 85-90. (査読無)
57. 久保 ゆかり (2016b). 幼児の感情語りの世界-何に支えられ何を支えるのか- エモーション・スタディーズ, 2 (1), 10-15. (査読有)
58. 桑原 裕子・高橋 幸子・松井 豊 (2016). 東日本大震災の被災自治体職員の心的外傷後ストレス反応 ト라우マティック・ストレス, 13, 161-169. (査読有)

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

59. 松田 英子・岡田 斉 (2016). タイプ A 行動パターンと夢想起の関連：夢想起の内容、頻度、感覚モダリティおよび感情の分析 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報, 13, 91-97. (査読無)
60. 松井 豊 (2016a). 恋愛とカップル形成の実証研究 家族療法研究, 33, 171-177. (査読有)
61. 松井 豊 (2016b). 被災した自治体職員のメンタルヘルスについて-惨事ストレスを中心に- 自治体危機管理研究, 18, 69-75. (査読無)
62. 松井 豊 (2016c). 被災者を対象とした調査・研究の留意点 心理学ワールド, 72, 7-9. (査読無)
63. 松井 豊 (2016d). 「大震災からの心の回復」 こころの科学, 197, 104. (査読無)
64. 松井 豊 (2016e). 消防に関わる惨事ストレス 月刊フェスク, 423, 26-31. (査読無)
65. Mizuno, T. (2016a). Press Freedom in the Enemy's Language: Government Control of Japanese-Language Newspapers in Japanese American Camps during World War II, Journalism & Mass Communication Quarterly, 93 (1), 204-228. (査読有)
66. 水野 剛也 (2016b). 「《メディア史料案内》 アメリカ合衆国の日本語新聞 日本国内の主要所蔵機関を中心に」 メディア史研究, 40, 120~140. (査読有)
67. 毛 新華・大坊 郁夫 (2016). 中国文化要素が配慮された社会的スキル・トレーニングプログラムの効果：中国人大学生の自他評価からみた意識と行動の変化を中心とする検討 社会心理学研究, 32, 21-40. (査読有)
68. 尾崎 由佳, 後藤 崇志, 小林 麻衣, 沓澤 岳 (2016) セルフコントロール尺度短縮版の邦訳 および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 87 (2), 144-154. (査読有)
69. 坂田 瑞樹・松田 英子 (2016). 大学生の主張行動および対人ストレスコーピングが友人満足感に及ぼす影響 江戸川大学紀要, 26, 51-58. (査読無)
70. 鈴木 規子 (2016a). フランスのポルトガル系移民の学校適応-ポルトガル系政治家の事例 白山人類学, 19, 81-103. (査読有)
71. 鈴木 規子 (2016b). 移民社会フランスの市民性教育のゆくえ-テロ事件、急増する

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

難民の後に 三田評論, 4月号, 40-46. (査読無)

72. 鈴木 規子 (2016c). フランスにおける市民的統合と移民の動向-ポルトガル系移民の政治的・経済的統合に関する事例- 三田社会学, 21, 18-29. (査読有)
73. *高橋 幸子・仲嶺 真・小林 麻衣子・藤田 浩之・松井 豊 (2016). 地下鉄サリン事件 20年後の被害者および被害者家族の諸症状 東洋大学 21世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報, 13, 33-44. (査読無)
74. 渡邊 寛・松井 豊 (2016). 新しい男性役割の側面に関する探索的検討 筑波大学心理学研究, 52, 85-96. (査読有)
75. 大坊郁夫 (2015a). 感情研究の彼岸はどこにある?—感情心理学は新たな科学として飛翔する— 感情心理学研究, 22(2), 89-93. (査読有)
76. 大坊郁夫 (2015b). Well-being を目指す対人コミュニケーション研究 モチベーション研究, 4, 1-10. (査読無)
77. 福岡欣治(2015a). 日常ストレス経験に伴う親友からの肯定的および否定的相互作用と心理的健康—ペア・データを含めた検討— 川崎医療福祉学会誌, 24(2), 273-281. (査読無)
78. 福岡欣治 (2015b). 他者依存性とソーシャル・サポートが心理的健康に及ぼす影響—大学生の友人関係における実際のサポート授受に注目して— 川崎医療福祉学会誌, 24(2), 201-207. (査読無)
79. 堀毛一也・大島尚 (2015). サステイナブルな心性・行動と主観的 well-being の関連について—web 調査による分析結果 東洋大学・エコフィロソフィ研究, 9, 139-150. (査読無)
80. 松田英子 (2015). 悪夢の認知行動療法: セルフモニタリング, 認知再構成法およびイメージエクスポージャー法の利用 イメージ心理学研究, 13, 17-22. (査読有)
81. 大島尚・堀毛一也 (2015). 環境問題とコミュニティ意識—社会関係資本からの検討—東洋大学・エコフィロソフィ研究, 9, 151-165. (査読無)
82. 山本須美子(2015a). 「EU における「新しい」中国系コミュニティの特徴——イタリア・ハンガリー・ドイツの場合」『東洋大学社会学部紀要』52(2)、87-101. (査読無)

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

83. 山本須美子(2015b). 「オランダにおける中国系第二世代の社会統合——ライフヒストリーの分析から」『移民政策研究』7、151-166. (査読有)
84. Yamamoto, Sumiko (2015a). ‘School Success and Failure: Changes seen in children of Chinese descent in Paris’, *Journal 華人とは何か？華人3世、2世、1.5世の語りから見る在日華人意識の変容 of Chinese Overseas* 11-1、72-86. (査読有)
85. 山本須美子(2015b). 「オランダにおける文氏宗親会の現状と役割」『東洋大学アジア文化研究所研究年報』50: 151-164、 (査読無)
86. Cheong, Y.G., Rie, J., Ando, K., & Fukuoka, Y. (2015). Risk reporting and the crisis of journalists. *Korean Journal of Broadcasting & Telecommunications Research*.
87. 朴 喜静・大坊郁夫 (2014). 個人特性が嘘をつくときに表われる非言語行動に及ぼす影響 応用心理学研究, 39(3), 215-224. (査読有)
88. 大坊郁夫 (2014). 場を活性化するコミュニケーション 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報, 11 号, 71-75. (査読無)
89. Ken Fujiwara & Ikuo Daibo (2014). The extraction of nonverbal behaviors :Using video images and speech-signal analysis in dyadic conversation *Journal of Nonverbal Behavior*,38,377-388. (査読有)
90. 朴 喜静・大坊郁夫 (2014). 怒りと悲しみが真偽性判断の正答率に及ぼす影響 応用心理学研究, 40(1), 1-10. (査読有)
91. 月田有香・高嶋和毅・横山ひとみ・市野順子・伊藤雄一・大坊郁夫・北村喜文 (2014). 即興劇 (インプロ) によるコミュニケーショントレーニングが集団討論場面に与える影響 電子情報通信学会技術研究報告, 114(67), 193-198. (査読無)
92. 横山ひとみ・大坊郁夫 (2014). 対面説得事態での送り手の非言語行動の検討 応用心理学研究, 40(2), 93-101. (査読有)
93. 清水裕士・大坊郁夫 (2014). 潜在ランク理論による精神的健康調査票(GHQ)の順序的評価 心理学研究, 85(5) ,464-473. (査読有)
94. 上出寛子・田中共子・堀毛一也・藤森立男・大坊郁夫 (2014). well-being の心理学～今、そしてこれからの well-being 研究の応用・実践～ 応用心理学研究,40、106-137. (査読有)

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

95. Go Endo, Hirokazu Tachikawa, Yoshiharu Fukuoka, Miyuki Aiba, Kiyotaka Nemoto, Yuki Shiratori, Yutaka Matsui, Masafumi Doi, & Takashi Asada (2014). How perceived social support relates to suicidal ideation: A Japanese social resident survey. *International Journal of Social Psychiatry*, 60(3) 290-298. (査読有)
96. 堀毛一也 (2014). 持続可能な well-being をどう目指すか 日本応用心理学会公開シンポジウム 2013 Well-being の心理学～今, そしてこれからの well-being 研究の応用・実践～ *応用心理学研究*,40,2,120-127. (査読有)
97. 角山剛 (2014a). 組織行動をめぐる最近の研究動向 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報第 11 号, p.13-16. (査読無)
98. 角山剛 (2014b). 動機づけ心理学はどのように活用されているか 児童心理臨時増刊号金子書房 (査読無)
99. Kato, T. (2014a). Testing the sexual imagination hypothesis for gender differences in response to infidelity. **BMC Research Notes**, 7:860. DOI: 10.1186/1756-0500-7-860. PMID: 25432800
100. Kato, T. (2014b). Relationship between coping with interpersonal stressors and depressive symptoms in the United States, Australia, and China: A focus on reassessing coping. **PLoS ONE**, *9(10)*: e109644. DOI: 10.1371/journal.pone.0109644. PMID: 25299135 (査読有)
101. Kato, T. (2014c). Effects of flexibility in coping with chronic headaches on depressive symptoms. **International Journal of Behavioral Medicine**, *first published online: September 18*.* DOI: 10.1007/s12529-014-9443-1. PMID: 25231548 (査読有)
102. Kato, T. (2014d). A reconsideration of sex differences in response to sexual and emotional infidelity. **Archives of Sexual Behavior**, **43*, 1281-1288. DOI: 10.1007/s10508-014-0276-4. PMID: 24647817. (査読有)
103. Kato, T. (2014e). Coping with workplace interpersonal stress among Japanese employees. **Stress and Health**, first published online: March 18. DOI: 10.1002/smi.2566. PMID: 24639236. (査読有)
104. Kato, T. (2014f). Development of the Sleep Quality Questionnaire in healthy adults. **Journal of Health Psychology**, **19*, 977-986*. *DOI:

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

10.1177/1359105313482168. PMID: 23720542 (査読有)

105. Kato, T. (2014g). Insomnia symptoms, depressive symptoms, and suicide ideation in Japanese white-collar employees*. *International Journal of Behavioral Medicine*, **21*, 506-510*. *DOI: 10.1007/s12529-013-9364-4. PMID: 24136401. (査読有)
106. Kato, T. (2014h). Coping with interpersonal stress and psychological distress at work: Comparison of hospital nursing staff and salespeople. **Psychology Research and Behavior Management*, 7*, 31-36. DOI: 10.2147/PRBM.S57030. PMID: 24470781. (査読有)
107. 久保ゆかり (2014). 自己の過去経験について語ること (autobiographical narratives) の発達 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報, 11, 17-22. (査読無)
108. 市村美帆・高田治樹・増野智彦・吉野美緒・稲本絵里・松井豊・横田裕行 (2014). 病院前救急診療活動を行う医師の精神的健康状態との関連 日本救急医学会雑誌, 25(4),141-151. (査読有)
109. 岡田 斉・松田 英子 (2014). 大学生の体験する悪夢の苦痛度尺度日本語版作成の試み イメージ心理学研究, 12, 41-52.
110. 高橋幸子・桑原裕子・松井豊 (2014). 東日本大震災で被災した自治体職員の急性ストレス反応 ストレス科学, 29, 60-67. (査読有)
111. 桑原裕子・高橋幸子・松井豊 (2014). 東日本大震災で被災した自治体職員の外傷後成長 筑波大学心理学研究,47,15-23. (査読有)
112. 山本陽一・松井豊 (2014). 中高生のボランティア動機、ボランティア活動の援助成果の探索的検討ー感想文の内容分析を通してー 筑波大学心理学研究,47,37-45. (査読有)
113. 茨木詩織・松井豊 (2014). 悩みを相談したくてもできないときに 身近な人に求める接し方の検討 筑波大学心理学研究,48,19-28. (査読有)
114. 高本真寛・松井豊 (2014). 対人ストレス・コーピングがストレスターの解決認知を媒介して精神的健康に及ぼす影響についての確証的検討 筑波大学心理学研究,48,29-35. (査読有)
115. 仲嶺真・松井豊 (2014). 街中での異性への話しかけへの態度 ー行為者の印

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

- 象、パーソナリティ、行動的検討ー 筑波大学心理学研究,48,37-47. (査読有)
116. 水野剛也 (2014). 「日系アメリカ人強制立ち退き・収容をめぐる日米プロパガンダ戦 第二次世界大戦時のラジオ・トウキョウと「人質」論の再考」、『メディア史研究』第 36 号 (2014 年 8 月) : 42-65. (査読有)
117. 西野理子 「追跡パネル調査の改善に向けて：全国家族パネル調査の経験より」『中央調査報』No.683 : 1-7. (査読無)
118. 大島 尚 (2014). 社会的ジレンマにおける「監視ボランティア」の可能性と有効性 東洋大学「エコ・フィロソフィ」研究, Vol.8, 77-93. (査読無)
119. *堀毛一也・安藤清志・大島尚 (2014). 社会的逆境後の精神的回復・成長につながる資源ーポジティブ心理学的観点を中心にー 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報 第 11 号 3-8. (査読無)
120. Yuko Suda (2014) Changing relationships between nonprofit and for-profit human service organizations under the long-term care system in Japan. *Voluntas*, 25: 1235 - 1261. (査読有)
121. 須田木綿子・児玉寛子 (2014) 高齢者と家族介護者の精神的健康 (査読あり) 老年社会科学, 36(1), 34-38, 2014. (査読有)
122. 古城隆文・谷口尚子 (2014). 「選挙制度が有権者の満足度に与える影響の国際比較分析」『東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報』Vol. 11, 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター, pp. 51-70. (査読無)
123. 谷口尚子 (2014). 「政治学における実験研究：概要と展望」『選挙研究』第 30 巻 1 号, 日本選挙学会、pp.5-15 (査読有)
124. 戸梶亜紀彦 (2014). 職務動機づけを高めた出来事に関する検討 (2)ー仕事への責任・組織での役割を自覚した体験についてー 東洋大学社会学部紀要, 51-1 号, 27-43. (査読無)
125. 戸梶亜紀彦 (2014). 「感動体験を応用したワーク・モチベーションの効果的向上について」モチベーション研究 (モチベーション研究所), *Annual Report* 第 3 号, 48-56. (査読無)
126. 相羽美幸・太刀川弘和・福岡欣治・遠藤剛・白鳥裕貴・土井永史・松井豊・朝田隆 (2013). 自殺念慮とソーシャル・サポートの互惠性ー茨城県笠間市民を対象とした地域住民調査からー 自殺予防と危機介入, 33(1), 17-26. (査読有)

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

127. 相羽美幸・太刀川弘和・福岡欣治・遠藤剛・白鳥裕貴・松井豊・朝田隆 (2013). 簡易ソーシャル・サポート・ネットワーク尺度 (BISSEN) の開発 精神医学, 55(9), 863-873. (査読有)
128. 福岡欣治 (2013). 女子大学生におけるソーシャル・サポートおよび食に対する知識と適切な食行動のセルフ・コントロール 川崎医療福祉学会誌, 23(1), 101-110. (査読無)
129. Kato, T. (2013). Frequently used coping scales: A meta-analysis. Stress and Health, published online: December 12. DOI: 10.1002/smi.2557. PMID: 24338955. (査読有)
130. Kato, T. (2013). Insomnia symptoms, depressive symptoms, and suicide ideation in Japanese white-collar employees. International Journal of Behavioral Medicine, vol.21(3), pp.506-510, published online: October 18. DOI: 10.1007/s12529-013-9364-4. PMID: 24136401. (査読有)
131. Kato, T. (2013). Development of the Sleep Quality Questionnaire in Healthy Adults. Journal of Health Psychology, vol.19(8), 977-986, published online: May 29. DOI: 10.1177/1359105313482168. PMID: 23720542 (査読有)
132. 久保ゆかり (2013). 社会的知覚から社会的認知へー他者理解の発達ー 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報,10,31-37. (査読無)
133. 松井豊・立脇洋介・兪善英 (2013). 消防職員の惨事ストレスケアー惨事ストレス研修と危機介入システムー 産業精神保健, 21(1),18-30. (査読無)
134. 仲嶺真・大坊郁夫・松井豊 (2013). 初対面異性間における対人魅力と会話行動が親密化願望に及ぼす影響 筑波大学心理学研究,46,49-56. (査読有)
135. 吉野美緒・重村朋子・市村美帆・稲本絵里・川尻泰樹・増野智彦・松井豊・横田裕行 (2013). 病院前救急診療活動に従事する看護師の精神的健康に関する研究 日本臨床救急医学会雑誌,16(5),649-655. (査読有)
136. 古村健太郎・松井豊 (2013). 親密な関係におけるコミットメントのモデルの概観 対人社会心理学研究,13,59-70. (査読有)
137. 古村健太郎・仲嶺真・松井豊 (2013). 投資モデル尺度の邦訳と信頼性・妥当性の検討 筑波大学心理学研究,46,39-48. (査読有)

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

138. 兪善英・松井豊 (2013). 親しい他者に対するストレス開示抑制態度が精神的健康に及ぼす影響 筑波大学心理学研究,46,57-58. (査読有)
139. 兪善英・松井豊・畑中美穂 (2013). 都市部の消防団員における家族に対するストレス開示抑制態度とソーシャルサポートが精神的健康へ及ぼす影響 対人社会心理学研究, 13,49-58. (査読有)
140. 水野剛也 (2013). 「若者に新聞を読ませるには? 女子大生から見た、新聞の『いいね』『ビミョー』」 日本新聞労働組合連合(新聞労連) 産業政策研究会編, 『新聞労連産業政策研究会第 2 期最終報告書 新聞 2013 この山をどう登るか』(産業政策研究会), 90-96. (査読無)
141. 水野剛也 (2013). 「ひといき① 『紙の新聞』は記憶に残る」, 「ひといき② 若者に新聞を読ませるには」, 「ひといき③ アメリカの若者のニュース源」 日本新聞労働組合連合(新聞労連) 産業政策研究会編, 『新聞労連産業政策研究会第 2 期最終報告書 新聞 2013 この山をどう登るか』(産業政策研究会), 18, 41, 68. (査読無)
142. 水野剛也・福田朋実 (2013a). 「新聞 4 コマ漫画が描く鳩山由紀夫首相(中編) 首相在任期間中の 3 大紙の 4 コマ漫画に関する一分析 2009~2010」, 『社会学部紀要』第 50 巻・第 2 号, 19-36. (査読無)
143. 水野剛也・福田朋実 (2013b). 「新聞 4 コマ漫画が描く鳩山由紀夫首相(後編-1) 首相在任期間中の 3 大紙の 4 コマ漫画に関する一分析 2009~2010」, 『社会学部紀要』第 51 巻・第 1 号, 5-12. (査読無)
144. 水野剛也・福田朋実 (2013c). 「新聞 4 コマ漫画が描く鳩山由紀夫首相(後編-2) 首相在任期間中の 3 大紙の 4 コマ漫画に関する一分析 2009~2010」, 『社会学部紀要』第 51 巻・第 2 号, 5~21. (査読無)
145. Takeya Mizuno, (2013a)“A Disturbing and Ominous Voice from a Different Shore: Japanese Radio Propaganda and its Impact on the US Government’s Treatment of Japanese Americans during World War II,” The Japanese Journal of American Studies No.24 (June 2013): 105-124. (査読有)
146. Mizuno, T. (2013b). “An Enemy’s Talk of ‘Justice’: Japanese Radio Propaganda against Japanese American Mass Incarceration during World War II,” Journalism History Vol.39, No.2, (Summer 2013): 94-103. (査読有)
147. 須田木綿子 (2013). 「営利-非営利サービス供給組織の差異の縮小と社会福祉

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

法人の存在意義」 ソーシャルワーク研究, 39(1), 54-63. (査読無)

<図書>

1. 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター (HIRC21) (2018) 「現代人のこころのゆくえ 5 —ヒューマン・インタラクションの諸相—」, 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター
2. 須田 木綿子・平岡 公一・森川 美絵 (編著・訳) (2018). 東アジアの高齢者ケア 東信堂.
3. 谷口 尚子・栃原 修 (2018) 経済環境と市民的価値観の変容 池田謙一(編著)「日本人」は変化しているのか—価値観・ソーシャルネットワーク・民主主義 勁草書房.
4. 水野 剛也 (2018). 浅野七之助 日本にも影響与えた日系人ジャーナリスト 土屋礼子・井川充雄編・著(編) 近代日本メディア人物誌 ジャーナリスト編 (pp. 227-228) ミネルヴァ書房.
5. 上原 秀一・鈴木 規子 (2018). 第 1 章 フランス政治の変遷と教育改革 フランス教育学会 (編)『現代フランスの教育改革』 明石書店.
6. 大坊 郁夫 (2017a). 社会心理学へのいざない—社会心理学の現在とこれから— 大坊郁夫編 心理学と仕事 10 巻「社会心理学」第 1 章 (pp.1-16) 北大路書房
7. 堀毛 裕子 (2017). 乳がん患者へのポジティブ介入の試み 太田信夫 (監)・竹中晃二 (編) シリーズ心理学と仕事 12・健康心理学 (pp.131) 北大路書房.
8. 堀毛 一也 (2017). 健康心理学の応用とその可能性: ポジティブ心理学 大竹恵子 (編) 保健と健康の心理学—ポジティブヘルスの実現— ナカニシヤ出版.
9. 堀毛 一也・竹村 和久・小川 一美 (2017). 社会心理学: 人と社会との相互作用の探求 培風館.
10. 角山 剛 (2017a). 産業・組織科目 日本心理学諸学会連合心理学検定局(編) 心理学検定公式問題集 2017 年度版 実務教育出版.
11. 角山 剛 (2017b). モチベーション 馬場 昌雄・馬場 房子・岡村 一成 (監) 産業・組織心理学[改訂版] 白桃書房.

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

12. 久保 ゆかり (2017). 社会性の発達 近藤 清美・尾崎 康子 (編) 社会・情動発達とその支援 ミネルヴァ書房 (pp.60-75).
13. 松田 英子 (2017). 「不眠症者への健康心理学的援助」 日本健康心理学会 (企画) 『臨床健康心理学』 (分担執筆) (pp.139-155) ナカニシヤ出版.
14. 松井 豊 (2017). ストーキング 小田切紀子・野口康彦・青木聡 (編) 家族の心理 変わる家族の新しいかたち 金剛出版.
15. 西田 公昭 (2017). 第 15 章 マインド・コントロールと犯罪 越智啓太・桐生正幸 (編). 司法・犯罪心理学 北大路書房.
16. 鈴木 規子 (2017). フランスのポルトガル系移民の学校適応 山本須美子 (編) ヨーロッパにおける移民第二世代の学校適応-スーパーダイバーシティへの教育人類学的アプローチ (pp.269-296) 明石書店.
17. Tsuda, A., Tanaka, A., & Matsuda, E. (2017). Locus of Control. The Wiley-Blackwell Encyclopedia of Personality and Individual Differences. Wiley & Sons 2017 年 5 月.
18. 山本須美子 (編) (2017) ヨーロッパにおける移民第二世代の学校適応——スーパーダイバーシティへの教育人類学的アプローチ 明石書店.
19. 堀毛 一也 (2016). 健康心理学の応用とその可能性: ポジティブ心理学 大竹恵子 (編) 保健と健康の心理学: ポジティブヘルスの実現 (pp.214-234) ナカニシヤ出版.
20. 堀毛 裕子 (2016). ポジティブな特性と健康 大竹恵子 (編) 保健と健康の心理学・ポジティブヘルスの実現(pp.235-252) ナカニシヤ出版.
21. 角山 剛 (2016). 産業・組織科目 日本心理学諸学会連合心理学検定局(編) 心理学検定公式問題集 2016 年度版 実務教育出版.
22. 桐生 正幸 (2016a). 犯罪心理学 現代図書.
23. 桐生 正幸 (2016b). 犯罪心理学 日本犯罪心理学会 (編) 犯罪心理学辞典 丸善出版.
24. 松田 英子・東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター (2017). 眠る-心と体を守る仕組み 日本行動科学学会 (編) (pp.1- 47) 二瓶社.

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

25. 松井 豊 (2016). 災害で人を救う人を支えるために 安藤清志・松井豊 (編) 地域と職場で支える被災地支援-心理学にできること (pp.81- 95) 誠信書房.
26. 松井 豊 (2016). 援助行動 日本学校心理学会 (編) 学校心理学ハンドブック 第2版 (pp.92-93) 教育出版.
27. 水野 剛也 (2016). 浅野七之助 日本にも影響与えた日系人ジャーナリスト 土屋礼子 (編) 近代日本メディア人物誌 (pp. 247-248) ミネルヴァ書房.
28. Emery, E., Emery, M., & Roberts, N. L. (2000). The Press and America: An Interpretive History of the Mass Media 9th ed., Needham Heights, MA: Allyn and Bacon. (エメリー, E.・エメリー, M.・ロバーツ, N.L. 水野 剛也・大井 眞二・武市 英雄・長谷川 倫子・別府 三奈子 (訳) (2016). アメリカ報道史 ジャーナリストの視点から観た米国史 松柏社).
29. 西野 理子・中西泰子 (2016) 家族についての意識の変遷: APC 分析の適用によるコーホート効果の検討 稲葉昭英・保田時男・田淵六郎・田中重人編 日本の家族 1999-2009: 全国家族調査[NFRJ]による計量社会学 東京大学出版会, 47-67.
30. 杉山 憲司・松田 英子 (2016). パーソナリティ心理学-自己の探求と人間性の理解 2章 パーソナリティ心理学の研究法 (pp.19-46) 3章 伝統的なパーソナリティ理論 (pp.47-74) 6章 パーソナリティ心理学と隣接領域 (pp.111-138) 7章 パーソナリティ心理学と他学問とのコラボレーション (pp.139- 158) 培風館.
31. 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター (HIRC21) (2015) 「現代人のこころのゆくえ 4—ヒューマン・インタラクションの諸相—」, 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター, 128.
32. Kato, T. (2015). Burnout as a Risk Factor for Strain, Depressive Symptoms, Insomnia, Behavioral Outcomes, Suicide Attempts, and Well-Being among Full-Time Workers. T. N. Winston (Ed.), *Handbook on Burnout and Sleep Deprivation: Risk Factors, Management Strategies and Impact on Performance and Behavior*. NOVA Science Publishers. Pp.233-252
33. 安藤清志 (2014). 自己呈示と対人関係: 「自己と対人関係の社会心理学」の視点から 社会心理学研究の新展開 北大路書房 152.
34. 大坊郁夫 (2014). 場を活性化する: 対人コミュニケーションの社会心理学 高木修 監修 大坊郁夫・竹村和久編「社会心理学研究の新展開—社会に生きる人々の心理と行動」 26-39. 北大路書房 209.

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

35. 堀毛一也 (2014). パーソナリティと状況 唐沢かおり (編) 新・社会心理学 (pp.71-91) 北大路書房 218
36. 堀毛一也 (2014). 状況と性格 下山晴彦 (編集代表) 誠信心理学辞典 新版 (p.333-335) 誠信書房 1104.
37. 角山剛 (2014). 心理学検定公式問題集 2014 年度版(p.356-383) 実務教育出版 436.
38. 松井豊 (2014). 思いやり行動をとる心の動き 日本心理学会 (監) 高木修・竹村和久 (編) 思いやりはどこから来るの? =利他性の心理と行動(103-116) 誠信書房 188.
39. 立脇洋介・松井豊 (2014). 恋愛 児童心理学の進歩 2014 年版(96-119) 日本児童研究所 (監修) 金子書房 328.
40. 水野剛也 (2014). 『「自由の国」の報道統制 大戦下の日系ジャーナリズム』 吉川弘文館 208.
41. 須田木綿子 (2014). 福祉 NPO の役割と課題 社会福祉事典 丸善出版 784.
42. 須田木綿子 (2014). 論文投稿支援 社会福祉事典 丸善出版 784.
43. 山本須美子 (2014). EU における中国系移民の教育エスノグラフィ 東信堂 376.
44. 平岡公一・武川正吾・山田昌弘・黒田浩一郎(監修) 須田木綿子・鎮目真人・西野理子・檜田美雄(編) (2013). 研究道：学的探究の道案内 東信堂 320.
45. 堀毛一也 (2013). ポジティブ心理学の発展ーパーソナリティ領域を中心に 日本パーソナリティ心理学会 (企画) パーソナリティ心理学ハンドブック (pp.508-514) 福村出版 782.
46. 角山 剛 (2013). 産業領域 藤永保(監修) 最新 心理学事典 平凡社 910.
47. 角山 剛・佐久間俊和・田中康之・黒澤俊平 (2013). 実践 モチベーション・マネジメント PHP 出版 183.
48. 小玉正博・松井豊 (編) (2014). 生涯発達の中のカウンセリングⅣ 看護現場で生きるカウンセリング(pp.205-223) サイエンス社 288.
49. 西田公昭 共編著 (2013). 大学生のリスク・マネジメント 吉川肇子・杉浦淳吉・

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

西田公昭編 ナカニシヤ出版 160.

50. 西田公昭 (2013). マインド・コントロール 谷口泰富・藤田主一・桐生正幸編 クローズアップ犯罪(pp.213-222) 福村出版 241.
51. 松井豊 (2013). 災害救援者の惨事ストレス (財)日本防火・危機管理促進協会(編) 東日本大震災に対する危機への対応 同協会発行, pp.70-106.
52. 大島 尚 (2013). ボランティアと社会関係資本 山田利明・河本英夫・稲垣諭(編著) エコロジーをデザインする—エコ・フィロソフィの挑戦(pp.170-185) 春秋社 352.
53. 大島 尚 (2013). 社会関係資本の測定とその意義について 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクシオン・リサーチ・センター(編) 現代人のこころのゆくえ 3 (pp.83-102) 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクシオン・リサーチ・センター 134.
54. 須田木綿子 (2013). 海外英文誌への投稿というチャレンジ 平岡公一・武川正吾・山田昌弘・黒田浩一郎(監修) 須田木綿子・鎮目真人・西野理子・檜田美雄(編) 研究道：学的探求の道案内(pp.235-246) 東信堂 320.
55. 須田木綿子 (2013). アクティブ・エイジングの実際 福祉社会学会編集 福祉社会ハンドブック：現代を読み解く 98 の論点(pp.152-153) 中央法規 223.
56. 須田木綿子 (2013). 何が高齢者虐待を生み出すのか？ 福祉社会学会編集 福祉社会ハンドブック：現代を読み解く 98 の論点(pp.156-157) 中央法規 223.
57. 須田木綿子 (2013). 恩師について 山手茂・米林喜男・須田木綿子編 園田保健社会学の形成と展開(pp.156-163) 東信堂 300.
58. 谷口尚子 (2013). 訪問面接調査とインターネット調査にみる投票行動・政治意識の差 現代人のこころのゆくえ 3 (pp.103-134) 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクシオン・リサーチ・センター 134.
59. 山手茂・米林喜男・須田木綿子編 (2013). 園田保健社会学の形成と展開 東信堂 300.
60. 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクシオン・リサーチ・センター (HIRC21) (2013) 「現代人のこころのゆくえ 3—ヒューマン・インタラクシオンの諸相—」, 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクシオン・リサーチ・センター, 134.

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

<学会発表>

1. Kaneko, M., Takawaki, R., Ozaki, Y. “Duration of Emotional Experience and its Relationship with Duration of Emotion-Eliciting Event: Using Experience Sampling Survey.” 19th Annual Convention of Society for Personality and Social Psychology, Atlanta, Georgia, U.S.A. (March 3, 2018).
2. Kuraya, T., & Ando, K. “Schadenfreude as Backlash toward Gender Deviance: Do Gender Non-conforming Members’ Misfortunes Induce Experiences of Pleasure under System Threat?” 19th Annual Convention of Society for Personality and Social Psychology, Atlanta, Georgia, U.S.A. (March 3, 2018).
3. Kutsuzawa, G., Fukase, S., Ozaki, Y., Narita, N., & Osaka, H. “Mental contrasting, implementation intentions, and related experience of stress.” 19th Annual Convention of Society for Personality and Social Psychology, Atlanta, Georgia, U.S.A. (March 2, 2018).
4. Ozaki, Y., & Kaneko, M. “Social Exclusion Instigates Future-Oriented Choice in Temporal Preference Tasks” 19th Annual Convention of Society for Personality and Social Psychology, Atlanta, Georgia, U.S.A. (March 2, 2018).
5. Daibo, I., & Kakuyama, T. “Influence of employees’ working characteristics and the psychological states on their subjective well-being enhancement.” AASP2017 (12th Conference of the Asian Association of Social Psychology), Auckland, New Zealand (August 27, 2017).
6. 江利川 滋・山田 一成 「公募型 Web 調査における回答デバイスと回答傾向 (2) — 回答デバイスによるテレビ視聴時間回答の変化— 日本社会心理学会第 58 回大会 2017 年 10 月 28 日 広島大学 (広島県東広島市).
7. 日向野 智子・山極 和佳・藤後 悦子・角山 剛 「潜在保育士の退職理由と再就職意欲の実態」 日本心理学会第 81 回大会 2017 年 9 月 20 日 久留米シティプラザ (福岡県久留米市).
8. 廣瀬 竜太郎・木村 真利子・西田 公昭 「金融機関における特殊詐欺対策に関する心理学的検討(1): 顧客に対する有効な声掛け方法の検討」 日本応用心理学会第 84 回大会 2017 年 8 月 27 日 立正大学 (東京都品川区).
9. 堀毛 裕子・原 央晃 「シャーデンフロイデの喚起によるネガティブ感情の変化— 『他人の不幸は蜜の味』と感ずることの効果—」 日本パーソナリティ心理学会第 26 回大会 東北文教大学 (山形県山形市).

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

- 10.堀毛 裕子・佐藤 美華・松浦 裕美・佐藤 春奈・君島 伊造 「乳がん患者おけるポジティブ経験—ポジティブ介入により報告された「よいこと探し」の内容分析—」日本健康心理学会第 30 回大会 2017 年 9 月 明治大学 (東京都千代田区).
- 11.Horike, H. “Long-term effects of positive intervention in breast cancer patients.” 5th World Congress on Positive Psychology, Montreal, Canada (July 14, 2017).
12. *Horike,K. 2017 Mental recovery from social adversities: Comparison among three adversities. 5th World Congress on Positive Psychology (2017 June, Montreal, Canada.)
- 13.Horike, K. “Mental recovery from social adversities: Comparison among three adversities.” 5th World Congress on Positive Psychology, Montreal, Canada (July 14, 2017).
14. *堀毛 一也 「主観的ウェル・ビーイング尺度間の関連に関する整理・検討」日本社会心理学会第 58 回大会 2017 年 10 月 30 日 広島大学 (広島県東広島市).
15. *堀毛 一也・安藤 清志・大島 尚・堀毛 裕子・高橋 幸子 「社会的逆境からの個人・回復資源 (3) —死別体験者と離別体験者の PTSD、PTG、精神的回復・成長資源の比較—」日本心理学会第 81 回大会 2017 年 9 月 久留米シティプラザ (福岡県久留米市).
- 16.堀毛 一也・堀毛裕子 「主観的ウェル・ビーイング尺度間の関連に関する整理・検討」日本社会心理学会第 58 回大会 2017 年 10 月 広島大学 (広島県東広島市).
- 17.堀内 聡・津田 彰・米田 健一郎・伏島 あゆみ・三原 健吾・田中 芳幸・岡村 尚昌・松田 英子・津田 茂子・内村 直尚(2017). 「ポジティブティと気分の関連に対するストレスの媒介効果に関する検討」第 24 回日本行動医学会学術総会 2017 年 12 月 2 日 聖路加国際大学 (東京都中央区).
- 18.磯 友輝子・小林 寛子・角山 剛・大坊 郁夫 「学習行動の促進・阻害要因の検討～小学生の内発的動機づけを中心に～」日本心理学会第 81 回大会 2017 年 9 月 20 日 久留米シティプラザ (福岡県久留米市).
19. *金子 迪大・鷹阪 龍太・尾崎 由佳 「経験サンプリング法を用いた情動持続時間の検討」日本社会心理学会第 58 回大会 2017 年 10 月 30 日 広島大学 (広島県東広島市).

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

20. 木村 真利子・廣瀬 竜太郎・西田 公昭 「金融機関における特殊詐欺対策に関する心理学的検討 (2)：声掛けに対する顧客反応への金融機関職員の意見分析」 日本応用心理学会第 84 回大会 2017 年 8 月 27 日 立正大学 (東京都品川区).
21. 木村 真利子・西田 公昭 「破壊的カルトにおけるビリーフ・システムの形成・変容／維持・強化 (1)：集団との接触時点における個人の背景要因に関する検討」 日本グループミックス学会第 64 回大会 2017 年 9 月 30 日 東京大学 (東京都文京区).
22. 木村 真利子・西田 公昭 「破壊的カルトにおけるビリーフ・システムの形成・変容／維持・強化 (2)：マインド・コントロール技術の団体間比較とビリーフ・システムへの影響」 日本社会心理学会第 58 回大会 2017 年 10 月 28 日 広島大学 (広島県東広島市).
23. Kimura, M., & Nishida, K. “Cultic Belief Formation and Maintenance by Mind Control.” Annual Conference of International Cultic Studies 2017, Bourdoux, France (June 29, 2017).
24. 久保 ゆかり 感情経験について語ることの発達—幼児の感情語りにおいて時間的文節化を支えることの効果— 日本発達心理学会第 28 回大会 2017 年 3 月 26 日 広島大学 (広島県東広島市).
25. 杵澤 岳・尾崎 由佳 「セルフコントロール特性の高さがトレーニングの効果に及ぼす影響」 日本社会心理学会第 58 回大会 2017 年 10 月 29 日 広島大学 (広島県東広島市).
26. 倉矢 匠・安藤 清志 「“男と女はこんなに違う” は受け入れられているのか—効果量の図視化を用いたジェンダー類似モデルとの比較検証および両面価値的性差別の影響—」 日本社会心理学会第 58 回大会 2017 年 10 月 29 日 広島大学 (広島県東広島市).
27. 松田 英子 「高齢者の夢想起と認知機能に関する研究 (2) —施設入所認知症者と健常高齢者の夢の頻度, 長さ, 内容に関する比較— 日本健康心理学会第 30 回記念大会 2017 年 9 月 3 日 明治大学 (東京都千代田区).
28. 松田 英子・岡田 斉 「睡眠の不調と Big Five Personality Traits の関連についての予備的研究」 日本パーソナリティ心理学会第 26 回大会 2017 年 9 月 8 日 東北文京大学 (山形県山形市).
29. 松田 英子・岡田 斉 「夢想起の発達差に関する研究 —高齢者・大学生・高校生の夢の頻度と内容に関する比較—」 日本心理学会第 81 回大会 2017 年 9 月 22

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

日 久留米シティプラザ (福岡県久留米市) .

30. Mizuno, T. “The ‘Enemy Language’ Press under Martial Law: Military Control of Japanese Newspapers in Wartime Hawai‘i.” East-West Center, Honolulu, Hawai‘I (March 27, 2017).
31. Mizuno, T. “The Impact of Pearl Harbor on the Japanese-Language Press in Hawai‘i: Immediate Reactions to the Attack and Subsequent Military Licensing, Suspension, and Censorship.” Association for Education in Journalism and Mass Communication (AEJMC), National Convention, Chicago (August 9, 2017).
32. Mizuno, T. “The “Enemy Language” Press in Hawai‘i under Martial Law: The Nippu Jiji, Hawaii Houchi, and Licensing System during World War II.” Japanese Diaspora Initiative Workshop, Hoover Institution Library & Archives, Stanford University (November 13-15, 2017).
33. 水野 剛也 「戒厳令下のハワイ日本語新聞と統制 真珠湾攻撃から報道許可制度の施行まで」 日本アメリカ史学会 2017年9月24日 愛知県立大学 (愛知県長久手市).
34. 中川 瑞巳・松田 英子 「マインドフルネス瞑想が自己肯定意識とセルフコントロールに与える影響」 日本行動科学学会第33回ウィンターカンファレンス 2017年2月25日 花月荘 (石川県白山市).
35. 尾崎 由佳, 成田 範之, 逢坂 宏子, 沓澤 岳, 深瀬 菜瑛子 「MCII (Mental Contrasting & Implementation Intention)による達成促進効果の検証」 日本社会心理学会第58回大会 2017年10月29日 広島大学 (広島県東広島市).
36. 岡田 斉・松田 英子 「大学生を対象にした悪夢の内容別頻度についての調査」 日本イメージ心理学会第18回大会 2017年8月23日 大阪人間科学大学 (大阪府摂津市).
37. 岡田 斉・松田 英子 「悪夢の苦痛度に関連する精神的要因の検討」 日本心理学会第81回大会 2017年9月20日 久留米シティプラザ (福岡県久留米市).
38. 尾上 成一・谷口 尚子・澁谷 壮紀 “If You Can Be Reborn, What Is Your Desirable Income Distribution? An Experiment of Rawls's Justice.” 日本政治学会研究大会 2017年9月24日 法政大学 (東京都千代田区).
39. Suda, Y. “Changes in citizen participation in Japanese civil society.” 2017

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

ARNOVA Asian conference. 人民大学, Beijing, China (June 6-7, 2017).

40. 高橋 萌黄・松田 英子 「友人との共食が大学生のメンタルヘルスに与える影響」
日本行動科学学会第 33 回ウィンターカンファレンス 2017 年 2 月 25 日 花月荘
(石川県白山市).
41. 谷口 尚子 「排外主義に関する国際比較分析」 日本選挙学会研究会 2017 年 5
月 20 日 香川大学 (香川県香川市).
42. *Takahashi, S., Yuk, Y., Rie, J., Ando, K., Ohshima, T., & Horike, K. “The
experiences of social adversity : The comparison between Korean and Japanese
middle and old ages (4) -Determinants of PTSD symptoms - “ 2017 Annual
Conference of the Korean Psychological Association, Sejon University in
Soul, Korea (August 18, 2017)
43. *高橋幸子・安藤清志・堀毛一也・大島尚社会的逆境からの回復に関する基礎調査
(5) PTSD 症状のリスク率と規定因 日本社会心理学会第 58 回大会 2017 年 10
月 28 日 広島大学 (広島県東広島市)
44. 戸梶 亜紀彦 「職場の人間関係に基づいた若年層のレジリエンス向上策」 日本
感情心理学会第 25 回大会 2017 年 6 月 24 日 同志社大学 (京都府京都市).
45. 戸梶 亜紀彦 「オフィス改革による公務員の職場における意識・行動の変化に関
する検討 ―愛媛県西予市を事例として―」 日本認知科学学会第 34 回大会 2017
年 9 月 14 日 金沢大学 (石川県金沢市).
46. 王 尚・松田 英子 「中国人大学生の睡眠の質と抑うつ, 不安及び人格特性との関
連」 日本健康心理学会第 30 回記念大会 2017 年 9 月 2 日 明治大学 (東京都
千代田区).
47. Watanabe, T., & Nishida, K. “Social Psychological Study of the Recovery Process
of Former Cult Members.” Annual Conference of International Cultic Studies
2017, Bourdoux, France (July 1, 2017).
48. 渡辺 和弥・西田 公昭 「破壊的カルト脱会者の心理的回復過程 (1) : 心理的回復
過程モデルの作成」 日本グループミックス学会第 64 回大会 2017 年 9 月 30 日
東京大学 (東京都文京区).
49. 渡辺 和弥・西田 公昭 「破壊的カルト脱会者の心理的回復過程 (2) : 心理的回復
過程モデルの妥当性の検討」 日本社会心理学会第 58 回大会 2017 年 10 月 28 日
広島大学 (広島県東広島市).

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

50. Winkler, G. C., & Taniguchi, N. “The Impacts of Electoral System Reform on the Party Manifestoes in Japan.” The 2017 Asian Electoral Studies Conference, Incheon, South Korea (October 28, 2017).
51. 山田 一成 「Web 調査における回答時間と回答中断行動（特別セッション Web 調査における回答行動の検討） 日本行動計量学会第 45 回大会 2017 年 8 月 30 日 静岡大学（静岡県静岡市）.
52. 山田 一成・江利川 滋. 公募型 Web 調査における回答デバイスと回答傾向 (1) —スマートフォン回答者の回答者特性と回答ストレス— 日本社会心理学会第 58 回大会 2017 年 10 月 28 日 広島大学 (広島県東広島市).
53. Yamamoto, S. “School Failure among new Chinese immigrants from Wenzhou in Paris schools.” the Congress of ISSCO (the International Society for the Study of Chinese Overseas) Nagasaki, Nagasaki University, Nagasaki, Japan (November 19, 2017).
54. 米田 健一郎・津田 彰・堀内 聡・伏島 あゆみ・三原 健吾・田中 芳幸・岡村 尚昌・松田 英子・津田 茂子・内村 直尚 「邦訳版 Stress Mindset Measure の因子構造と信頼性・妥当性の検討」 日本心理学会第 81 回大会 2017 年 9 月 22 日 久留米シティプラザ (福岡県久留米市).
55. *Yuk, Y., Rie, J., Ando, K., Ohshima, T., Horike, K. & Takahashi, S. “The experiences of social adversity : The comparison between Korean and Japanese middle and old ages (3)– Determinants of Posttraumatic growth –“ 2017 Annual Conference of the Korean Psychological Association, Sejon University in Soul, Korea (August 18, 2017)
56. *陸英善・高橋幸子・安藤清志・堀毛一也・大島尚・李柱一 社会的逆境からの回復に関する基礎調査 (6) —PTSD 症状, 逆境経験からの立ち直り, 外傷後成長の規定因に関する日韓比較— 日本社会心理学会第 58 回大会 2017 年 10 月 28 日 広島大学 (広島県東広島市)
57. 阿部 光弘・染矢 瑞枝・桐生 正幸 「自動車に対する悪戯傷の検討 3—チェックシートによる加害行動の分析—」 日本応用心理学会第 83 回大会 2016 年 9 月 1 日 札幌市立大学 桑園キャンパス (北海道札幌市).
58. 大坊 郁夫・角山 剛 「勤労者の転職経験と仕事への影響」 日本応用心理学会第 83 回大会 2016 年 8 月 31 日 札幌市立大学 桑園キャンパス (北海道札幌市).

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

59. 大坊 郁夫・角山 剛 「勤労者の転職経験と仕事への意欲,well-being」 日本応用心理学会第 83 回大会 2016 年 9 月 1 日 札幌市立大学 桑園キャンパス (北海道札幌市).
60. 江利川 滋・山田 一成 「Web 調査における SD 法と最小限化回答 (4) — Straight-lining 規定因の再検討—」 日本社会心理学会第 57 回大会 2016 年 9 月 18 日 関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス (兵庫県西宮市).
61. 藤原 健・大坊 郁夫 「身体的同調と感情判断の正確さ—二者間会話における検討—」 日本感情心理学会第 24 回大会 2016 年 6 月 18 日 筑波大学 つくばキャンパス (茨城県つくば市).
62. 日向野 智子・山極 和佳・藤後 悦子・角山 剛 「保育士の対保護者コミュニケーションの検討」 日本応用心理学会第 83 回大会 2016 年 8 月 31 日 札幌市立大学 桑園キャンパス (北海道札幌市).
63. 日向野 智子・藤後 悦子・山極 和佳・角山 剛 「保育士の保護者に対する対人苦手意識がストレスに及ぼす影響」 産業・組織心理学会第 32 回大会 2016 年 9 月 3 日 立教大学 新座キャンパス (埼玉県新座市).
64. *Horike, K., & Horike, H. “Mental Recovery from Social Adversities: Positive Psychological Analysis.” The 23rd International Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology, WINC in Nagoya, Aichi, Japan (August 1, 2016).
65. *堀毛 一也・安藤 清志・大島 尚・堀毛 裕子・高橋 幸子 「社会的逆境からの個人的・社会的回復資源 (2)—経済的困窮からの回復・成長と主観的ウェル・ビーイングの関係—」 日本社会心理学会第 57 回大会 2016 年 9 月 18 日 関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス (兵庫県西宮市).
66. Kakuyama, T., Tsuzuki, Y., & Matsui, T. “Improved prediction of performance by use of interaction of optimistic and pessimistic attribution styles among Japanese life insurance sales agents.” The 31st International Congress of Psychology, PACIFICO Yokohama in Yokohama, Kanagawa, Japan (July 26, 2016).
67. Kaneko, M., Mayuka M., Kutsuzawa, G., Ozaki, Y., Goto, T., & Kuraya, T. “Trait Self-Control is Negatively Related to Emotion Variability.” The 23rd International Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology, WINC in Nagoya, Aichi, Japan (August 2, 2016).

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

- 68.川瀬 洋子・松田 英子 「頻回な夢想起と意図的な記憶想起困難を訴える青年に対するスクールカウンセリング」 日本カウンセリング学会第 49 回大会 2016 年 8 月 27 日 山形大学 小白川キャンパス (山形県山形市).
- 69.Kiri, M. “A study of Japanese consumer complaint behavior: Examining the negative experiences of service employees.” The 31st International Congress of Psychology, PACIFICO Yokohama in Yokohama, Kanagawa, Japan (July 27, 2016).
- 70.久保 ゆかり 「園での行事経験について語ることの発達—年少組 (4 歳) 時点から年長組 (6 歳) 時点までの縦断的インタビュー— 日本発達心理学会第 27 回大会 2016 年 4 月 29 日 北海道大学 札幌キャンパス (北海道札幌市).
- 71.Kubo, Y. “Young children’s views of emotions in themselves: Preschoolers’ telling about their own emotional experiences.” The 31st International Congress of Psychology, PACIFICO Yokohama in Yokohama, Kanagawa, Japan (July 27, 2016).
- 72.沓澤 岳・尾崎 由佳・後藤 崇志・倉矢 匠・金子 迪大・湊 麻由香 「日常的な衝動抑制がセルフコントロール向上に及ぼす影響の検討」 2016 年 9 月 18 日 関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス (兵庫県西宮市).
- 73.倉矢 匠・安藤 清志 「促進的/抑制的ジェンダー規範は婚姻特性を反映しているか」 日本社会心理学会第 57 回大会 2016 年 9 月 18 日 関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス (兵庫県西宮市).
- 74.Kuraya, T., & Ando, K. “The influence of system-justifying motives on endorsement of gender similarity beliefs.” The 18th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Henry B. González Convention Center in San Antonio, Texas, U.S.A. (January 21, 2017).
- 75.桑原 裕子・高橋 幸子・松井 豊 「東日本大震災後、地方自治体のストレスケア対策に関する探索的調査」 第 15 回日本トラウマティック・ストレス学会 2016 年 5 月 20 日 仙台国際センター展示棟 (宮城県仙台市).
- 76.Matsuda, K. E., Liu, J., & Suzuki, H., & Kawase, Y. “Effects of psychological stress and acculturation attitudes on sleep disturbance in Chinese students in Japan.” The 1st Asian Society of Sleep Medicine (ASSM) , Taipei, Taiwan (March 12, 2016).
- 77.松田 英子・岡田 斉 「認知症者の夢と悪夢に関する研究—施設入所者と健常高齢

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

- 者の夢の頻度と内容に関する比較—」 日本ストレスマネジメント学会第 15 回大会 2016 年 7 月 31 日 別府大学 別府キャンパス (大分県別府市).
78. 松田 英子 「外傷性悪夢に対する短期認知行動療法—イメージエクスポージャー法とイメージリハーサル法の適用—」 日本カウンセリング学会第 49 回大会 2016 年 8 月 27 日 山形大学 小白川キャンパス (山形県山形市).
79. 松井 豊・桑原 裕子 「広域災害における消防職員のピアサポート研修」 第 21 回日本集団災害医学会総会・学術集会 2016 年 2 月 28 日 山形ビッグウイング (山形県山形市).
80. Matsui, Y., Fujita, H., Kobayashi, M., Takahashi, S., & Nakamine, S. “The symptoms of victims of the Tokyo subway sarin attack.” The 31st International Congress of Psychology, PACIFICO Yokohama in Yokohama, Kanagawa, Japan (July 28, 2016).
81. 松井 豊 「被災した自治体職員のメンタルヘルスについて—惨事ストレスを中心に」 日本自治体危機管理学会第 10 回研究大会 2016 年 10 月 29 日 明治大学 駿河台キャンパス (東京都千代田区).
82. 尾上 成一・谷口 尚子・澁谷 壮紀 “If You Were to Be Reborn, Which Income Distribution Would Be Desirable for You? : An Experimental Study about Effects of the Veil of Ignorance.” 公共選択学会第 20 回大会 2016 年 12 月 18 日 拓殖大学 文京キャンパス (東京都文京区).
83. 澁谷 壮紀・谷口 尚子・クリス・ウィンクラー 『『中位投票者』の変動に関する国際比較—政党公約データを用いたパネルデータ分析—』 日本選挙学会 2016 年度研究会 2016 年 5 月 15 日 日本大学 三崎町キャンパス (東京都千代田区).
84. 須田 木綿子 「公的対人サービスの民営化と非営利—営利組織 : 7 年間のパネル調査の総括」 福祉社会学会第 14 回年次大会 2016 年 6 月 18 日 奈良女子大学 (奈良県奈良市).
85. 須田 木綿子 「民営化政策とコミュニティ形成 : 市場原理と管理主義の視点から」 社会政策学会第 133 回大会 2016 年 10 月 16 日 同志社大学 今出川キャンパス (京都府京都市).
86. Takahashi, S., Ando, K., Ohshima, T., & Horike, K. “Diversity of social adversity -Severity, the ease of recuperation, and benefit-finding” The 31st International Congress of Psychology, PACIFICO Yokohama in Yokohama, Kanagawa, Japan (July 25, 2016).

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

87. Takahashi, S., Rie, J., Ando, K., Ohshima, T., Horike, K. & Yuk, Y. “The experiences of social adversity : The comparison between Korean and Japanese middle and old ages (2)- Stress reaction to social adversity –“ 2016 Annual Conference of the Korean Psychological Association, Gunsan Saqemangeum Convention Center in Gunsan, Korea (August 19, 2016).
88. 谷口 尚子 「政治学における実験研究」 公共選択学会第 20 回大会 2016 年 12 月 18 日 拓殖大学 文京キャンパス (東京都文京区).
89. 戸梶 亜紀彦 「職場におけるレジリエンス関連要因の検討—雇用形態と性別による相違について—」 日本感情心理学会第 24 回大会 2016 年 6 月 19 日 筑波大学 つくばキャンパス (茨城県つくば市).
90. 戸梶 亜紀彦 「職場におけるレジリエンス関連要因の検討(2) —職種および属性の違いによるやりがいの程度について—」 日本グループ・ダイナミクス学会第 63 回大会 2016 年 10 月 10 日 九州大学 箱崎キャンパス (福岡県福岡市).
91. Xu, Q., & Matsuda, K. E. “Personality traits and students' sleep disturbance: Comparative study between Japanese and Chinese in Japan.” The 1st Asian Society of Sleep Medicine (ASSM) , Taipei, Taiwan (March 12, 2016).
92. 山田 一成 「質問を『目で見る』調査のバイアスの傾向—郵送調査やインターネット調査による事例と今後の課題—」 (特別セッション) 日本行動計量学会第 44 回大会 2016 年 8 月 31 日 札幌学院大学 (北海道江別市).
93. 山田 一成・江利川 滋 「Web 調査における回答時間の規定要因—公募型 Web 調査の Likert 型心理尺度項目群に関する探索的調査研究」 日本行動計量学会第 44 回大会 2016 年 9 月 1 日 札幌学院大学 (北海道江別市).
94. 山田 一成・江利川 滋 「Web 調査における SD 法と最小限化回答 (3) —質問提示順序と Straight-lining—」 日本社会心理学会第 57 回大会 2016 年 9 月 18 日 関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス (兵庫県西宮市).
95. Yuk, Y., Rie, J., Ando, K., Ohshima, T., Horike, K. & Takahashi, S. “The experiences of social adversity : The comparison between Korean and Japanese middle and old ages (1) -Types of social adversity, self-esteem, and social support- “ 2016 Annual Conference of the Korean Psychological Association, Gunsan Saqemangeum Convention Center in Gunsan, Korea (August 19, 2016).
96. 陸 英善・李 柱一・安藤 清志・堀毛 一也・大島 尚・高橋 幸子 (2016). 社会的逆

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

境からの回復に関する基礎調査 (4) 中年期～高齢期の社会的逆境経験に関する日韓比較 日本社会心理学会第 57 回大会 2016 年 9 月 17 日 関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス (兵庫県西宮市).

97. Fujiwara, K., Xinhua, M., Kimura, M., Iso, Y., & Daibo, I. “Improving Group Performance: Equality in Utterances and the Proportion of Females to Males.” The 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Long Beach, California, U.S.A. (February, 2015).
98. Fujiwara, K., & Daibo, I. “Evaluating interpersonal synchrony with an automated method: Using spectrum analysis toward an unstructured conversation situation.” The Nonverbal Behavior Pre-Conference at The 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Long Beach, California, U.S.A. (February, 2015).
99. *堀毛一也・安藤清志・大島 尚・高橋幸子 社会的逆境からの個人的・社会的回復資源 (1) 家庭内不和と介護・看護体験からの回復資源の比較 日本社会心理学会第 59 回大会 2015 年 10 月 東京女子大学 *5
100. 西野理子 『夫婦関係の推移をとらえる試み』 家族社会学会第 3 回家族パネル研究会 2015 年 2 月 東京都文京区
101. *高橋幸子・安藤清志・大島 尚・堀毛一也 社会的逆境からの回復に関する基礎調査(3)社会的逆境の分類 日本社会心理学会第 59 回大会 2015 年 10 月 東京女子大学 *6
102. 田中恵子・中村健壽・福岡欣治 『医事課職員におけるバーンアウト』 日本医療秘書学会第 12 回学術大会 2015 年 2 月 愛知県名古屋市
103. *安藤清志 「カルト問題とマインド・コントロール論再考—今なお幻想の彼方へ惹かれる若者たち」日本社会心理学会 2014 年度第 58 回公開シンポジウム (指定討論)
2014 年 11 月 神奈川県横浜市 (フェリス女学院大学緑園キャンパス)
104. 福岡欣治 『保育園児をもつ母親の子どもへの働きかけと、子どもの社会的行動—子育てにおけるサポート源との関連を含めて—』 岡山心理学会第 62 回大会 2014 年 12 月 岡山県岡山市
105. 高垣明日香・福岡欣治 『両親同士の関係の良さは、大学生の友人関係と関連するか—社会的スキルおよび自尊感情を介した影響と、その男女差—』 岡山心理学会第 62 回大会 2014 年 12 月 岡山県岡山市

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

106. 山本須美子 『華人とは何か？華人 3 世、2 世、1.5 世の語りから見る在日華人意識の変容』日本華僑華人学会 シンポジウム（コメンテーター） 2014 年 11 月 東京都新宿区
107. 西田公昭 『カルト問題とマインド・コントロール論再考—今なお幻想の彼方へ惹かれる若者たち』日本社会心理学会第 58 回公開シンポジウム（話題提供）2014 年 11 月 神奈川県横浜市
108. 西田公昭 『学校における文化研究の新たな可能性 — 学校行事と部活動に焦点化したフィールドワークから —』日本教育心理学会第 56 回大会 自主シンポジウム（指定討論） 2014 年 11 月 兵庫県神戸市
109. 福岡欣治 『大学生の SNS 利用と精神的健康— SNS 利用時の肯定的および否定的経験に注目して—』日本健康心理学会第 27 回大会 2014 年 11 月 沖縄県国頭郡
110. Suda, Y “Nonprofit and for-profit operation under mixed economy: Mezzo-level organizational study approach.” The 9th Korea-Japan Symposium, Seoul, Korea (Oct, 2014).
111. 福岡欣治 『大学生の性同一性障害に対する経験と認識—身体障害、精神障害との比較から—』中国四国心理学会第 70 回大会 2014 年 10 月 広島県東広島市
112. 山本須美子 『ネーションと跨境——韓国・朝鮮の挑戦、生活の適応』韓国朝鮮文化研究会 シンポジウム（コメンテーター） 2014 年 10 月 東京都文京区
113. *堀毛一也・堀毛裕子 『社会的逆境からの精神的回復・成長資源に関する研究(1) 調査の概要』日本パーソナリティ心理学会第 23 回大会 2014 年 10 月 山梨県甲府市
114. *堀毛裕子・堀毛一也 『社会的逆境からの精神的回復・成長資源に関する研究(2) Sense of Coherence の視点から』日本パーソナリティ心理学会第 23 回大会 2014 年 10 月 山梨県甲府市
115. 戸梶亜紀彦 『職場の文脈における動機づけと感情』日本パーソナリティ心理学会第 23 回大会 広報委員会企画シンポジウム『感情と動機づけをめぐって』（話題提供） 2014 年 10 月 山梨県甲府市
116. 須田木綿子 『ニュー・ガバナンスの再帰的課題』日本学術会議主催学術フ

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

- オーラム『ニュー・ガバナンスの限界と社会的包摂』 日本学術会議社会学委員会・経済学委員会合同：包摂的社会政策に関する多角的検討分科会 2014年9月 東京都千代田区
117. 戸梶重紀彦 『動機づけ維持のためのレジリエンス向上に関する検討（2）－レジリエンスを維持するメカニズムについて－』 日本認知科学会第31回大会 2014年9月 愛知県名古屋市
118. 大坊郁夫 『共生のためのコミュニケーション力を高める－対人社会心理学の視点から－』 産業・組織心理学会第30回全国大会 シンポジウム 『産業・組織心理学のアイデンティティ，可能性，社会的貢献：他の心理学領域視点から』（話題提供） 2014年9月 北海道札幌市
119. 角山剛 『産業・組織心理学のアイデンティティ・可能性・社会的貢献：他の心理学領域の視点から』 産業・組織心理学会第30回全国大会 シンポジウム（指定討論者） 2014年9月 北海道札幌市
120. 前田具美・藤野紀子・松木敦志・松井豊 『職場への土産購入を規定する要因について』 産業・組織心理学会第30回全国大会 2014年9月 北海道札幌市
121. *堀毛一也・安藤清志・大島尚・高橋幸子・兪善英 『社会的逆境からの回復に関する基礎調査－(1)基礎概念と調査票の設計』 日本心理学会第78回大会 2014年9月 京都府京都市
122. *兪善英・高橋幸子・堀毛一也・安藤清志・大島尚 『社会的逆境からの回復に関する基礎調査－(2)性差の検討』 日本心理学会第78回大会 2014年9月 京都府京都市
123. 福岡欣治 『友人のサポートと大学生のレポート課題への取り組み－知覚されたサポート、実行されたサポートの効果』 日本心理学会第78回大会 2014年9月 京都府京都市
124. 高橋幸子・桑原裕子・松井豊 『被災自治体職員の被災2年4か月後のメンタルヘルス』 日本心理学会第78回大会 2014年9月 京都府京都市
125. 尾崎由佳・後藤崇志・小林麻衣・楠見孝 『接近的・回避的欲望に関する調査(3)：各欲望の遂行頻度と制御焦点・BIS/BASの関連』 日本心理学会第78回大会 2014年9月 京都府京都市
126. 大坊郁夫 『学校におけるリスク・マネジメント教育－必要か、可能か？－』 日本心理学会第78回大会 自主シンポジウム（指定討論） 2014年9月 京都府

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

京都市

127. 西田公昭 『学校におけるリスク・マネジメント教育 — 必要か, 可能か? —』
日本心理学会第 78 回大会 自主シンポジウム (話題提供) 2014 年 9 月 京都府
京都市
128. 久保ゆかり 『社会性とその発達—子どもの感情発達の視点から』 日本心理
学会第 78 回大会 シンポジウム『社会性とその発達: ヒトの特徴と教育可能性を
考える』(話題提供) 2014 年 9 月 京都府京都市
129. *高橋尚也・安藤清志・福岡欣治・Rie Ju-Il・Yeon Goo-Cheong・松井豊・井
上果子・畑中美穂 『韓国におけるジャーナリストの惨事ストレスの実態』 日本
グループ・ダイナミクス学会第 61 回大会 2014 年 9 月 東京都文京区
130. 池間愛梨・桐生正幸 『大阪府における子どもに対する性的前兆事案を誘発す
る環境要因の検討』 日本犯罪心理学会第 52 回大会 2014 年 9 月 東京都新宿区
131. 桐生正幸 『悪質クレマーの検討』 日本犯罪心理学会第 52 回大会 2014
年 9 月 東京都新宿区
132. 山本須美子 『中国系移民にみる学校適応・不適応 — パリの学校でのフィー
ルドワークから』 フランス教育学会第 32 回研究大会 シンポジウム『移民の子
どもの教育政策と学校適応をめぐる問題』 2014 年 9 月 東京都文京区
133. 福岡欣治・中村健壽・田中恵子 『医事課職員における上司および同僚のサポ
ートとバーンアウト、患者・家族対応との関連性』 日本応用心理学会第 81 回大
会 2014 年 8 月 愛知県名古屋市
134. 田中恵子・中村健壽・福岡欣治 『医事課職員における職務ストレスとバー
ンアウト傾向—患者接遇への注目を背景として—』 日本医療秘書実務学会第 5
回全国大会 2014 年 8 月 岡山県倉敷市
135. 藤原健・毛新華・木村昌紀・磯友輝子・大坊郁夫 『小集団の集団的知性に関
する—考察—課題解決場面における発話の分散と性別の割合—』 日本社会心理学
会第 55 回大会 2014 年 7 月 北海道札幌市
136. 福岡欣治 『友人からのネガティブサポートと失敗経験後の目標達成行動』
日本社会心理学会第 55 回大会 2014 年 7 月 北海道札幌市
137. 相羽美幸・太刀川弘和・松井豊・福岡欣治 『自殺念慮と自殺の対人関係理論』
日本社会心理学会第 55 回大会 2014 年 7 月 北海道札幌市

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

138. 兪善英・松井豊・太刀川弘和・相羽美幸・遠藤剛・福岡欣治・土井永史・朝田隆 『一般成人の家族に対するストレス開示抑制態度と抑うつに関連』 日本社会心理学会第 55 回大会 2014 年 7 月 北海道札幌市
139. 堀毛一也 『大震災後の心的成長と、サステイナブルな心性・行動および主観的 well-being の関連について』 日本社会心理学会第 55 回大会 2014 年 7 月 北海道札幌市
140. 松尾藍・松井豊 『日本における社会的ステレオタイプの実態とその分類』 日本社会心理学会第 55 回大会 2014 年 7 月 北海道札幌市
141. 小林麻衣子・白岩祐子・唐沢かおり・松井豊 『犯罪被害者遺族の視点から見た有用なサポート』 日本社会心理学会第 55 回大会 2014 年 7 月 北海道札幌市
142. 桑原裕子・高橋幸子・松井豊 『東日本大震災で被災した自治体職員のメンタルヘルスー 2 年 4 ヶ月後の継続調査からー』 日本社会心理学会第 55 回大会 2014 年 7 月 北海道札幌市
143. 戸梶亜紀彦 『動機づけ維持のためのレジリエンス向上に関する検討 (1)』 日本社会心理学会第 55 回大会 2014 年 7 月 北海道札幌市
144. Horike, K. “Revision of sustainable mind scale.” The 17th European Conference on Personality, Lausanne, Switzerland. (July, 2014).
145. Nisida, K. “What makes Japanese university students accept invitations to commit group antisocial acts?” The 28th International Congress of Applied Psychology, Paris, France. (July, 2014).
146. Takeya Mizuno (2014). “Press Freedom in the Enemy’s Language: Government Control of Japanese-Language Newspapers in Japanese American Camps during World War II,” Association for Education in Journalism and Mass Communication (AEJMC), National Convention, Montreal, Canada, August 7, 2014. (Acceptance Rate: 50.8%)
147. 桑原裕子、高橋幸子、松井豊 『東日本大震災による自治体職員の震災関連業務とメンタルヘルス 2ー 2 年 4 ヶ月後の調査からー』 日本トラウマティック・ストレス学会第 13 回大会 2014 年 5 月 福島県福島市
148. 太刀川弘和・相羽美幸・遠藤剛・白鳥裕貴・福岡欣治・松井豊・朝田隆 『自殺念慮と対人関係ー対人関係欲求質問票 (INQ-12) を用いた検討ー』 日本社会精

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

神医学会第 33 回大会 2014 年 3 月 東京都千代田区

149. Suda, Y. “The changing relationships among government, nonprofit and for-profit human service organizations: The long-term care insurance system in Japan.” Voluntas conference: Changes in the mixed economy of welfare – Comparative perspectives, Copenhagen, Denmark. (March, 2014).
150. Fujiwara, K., & Daibo, I. “Automated method for extracting nonverbal behavior in dyadic conversation: Using a thin slice technique.” The 15th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Austin, Texas, U.S.A. (February, 2014).
151. 水野剛也 『日系アメリカ人と／のマス・メディア、ジャーナリズム研究 「日本人」研究者が開拓すべき「広大な未踏地」』 メディア史研究会 2014 年 1 月 東京都千代田区
152. 福岡欣治 『出産後の夫婦におけるサポート、愛情、抑うつとの相互関係—産後 1 ヶ月時点での夫婦ペア・データによる検討—』 岡山心理学会第 61 回大会 2013 年 12 月 岡山県岡山市
153. 堀毛一也 『持続可能な well-being をどうめざすか』 日本応用心理学会シンポジウム 2013 『Well-being の心理学—今、そしてこれからの well-being 研究の応用・実践』 (話題提供) 2013 年 12 月 東京都足立区
154. 谷口尚子 『投票参加に関する実験的研究』 公共選択学会第 17 回大会 2013 年 11 月 東京都世田谷区
155. 相羽美幸・太刀川弘和・松井豊・福岡欣治・朝田隆 『自殺とソーシャル・キャピタルとの関連』 日本社会心理学会第 54 回大会 2013 年 11 月 沖縄県宜野湾市
156. 飛田操・水田恵三・安藤清志・渡辺浪二・佐藤史緒・堀毛一也・堀毛裕子・結城裕也 『複合災害がもたらした「喪失」: 浪江町民への面接調査から』 日本社会心理学会第 54 回大会 2013 年 11 月 沖縄県宜野湾市
157. 堀毛一也 『サステイナブルな心性・行動尺度の再検討』 日本社会心理学会第 54 回大会 2013 年 11 月 沖縄県宜野湾市
158. 戸梶亜紀彦 『動機づけ向上のためのシナリオ作成 (11) —周囲からの扱い、サポート、自己の達成に関連する事項の検討—』 日本社会心理学会第 54 回大会 2013 年 11 月 沖縄県宜野湾市

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

159. Suda, Y. “From increasing similarity to a new organizational form: Nonprofit and for-profit human service organizations.” The Annual Conference of the Association for Research on Nonprofit Organizations and Voluntary Action, Hartford, Connecticut, U.S.A. (November, 2013)
160. Suda, Y. “Caring aging population and its trickling effects: Experience of Japan. Global aging: Rising challenges and a quest for opportunities.” UNESCO Chair in Education & Technology for Social Change, Barcelona, Spain. (November, 2013).
161. 須田木綿子 『非営利—営利サービス供給組織の差異の縮小と「非」社会的企業組織の生成』 社会政策学会第 127 回（秋期）大会 テーマ別分科会「介護と社会組織：台湾—日本の共同研究から」 2013 年 10 月 大阪府大阪市
162. 西田公昭 『カルトとマインド・コントロール —well-being を阻害するもの—』モチベーション研究所第 2 回フォーラム ～Well-being をめざし明日へのモチベーションを育むために～ 2013 年 10 月 東京都足立区
163. 相羽美幸・太刀川弘和・松井豊・福岡欣治 『ソーシャル・サポート・ネットワークと抑うつとの関連—地域別・年代別・性別の検討—』 日本心理学会第 77 回大会 2013 年 9 月 北海道札幌市
164. 戸梶亜紀彦 『動機づけ向上のためのシナリオ作成（10）—評価・承認に関連する事項の検討—』 日本心理学会第 77 回大会 2013 年 9 月 北海道札幌市
165. 三村覚・谷釜了正・川本利恵子・角山剛・西條修光・藤田主一 『体罰を考える』 日本応用心理学会第 80 回記念大会 2013 年 9 月 東京都世田谷区
166. 谷口尚子 『投票参加に関する実証研究—若者の投票参加を中心として—』 日本政治学会大会 2013 年度研究大会 2013 年 9 月 北海道札幌市
167. 戸梶亜紀彦 『動機づけ向上のためのシナリオ作成（9）—職場内での評価・承認の効果に関する内容分析—』 日本認知科学会第 30 回大会 2013 年 9 月 東京都町田市
168. Horike, K. “Some influences of the Higashi-Nihon earthquake on the inhabitants’ well-being” The 10th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology, Yogyakarta, Indonesia. (August, 2013).
169. Fukuoka, Y. “Great East Japan Earthquake and Critical Incident Stress of

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

Journalists.” Oral Presentation in the Symposium "Tri-National Symposium on 'Disaster and Psychology'" at the 2013 Annual Conference of the Korean Psychological Association, Daejeon, Korea (August, 2013).

170. 堀毛一也 『東日本大震災が主観的 well-being に与えた影響について』 日本グループ・ダイナミクス学会第 60 回大会 2013 年 7 月 北海道札幌市
171. 戸梶亜紀彦 『社会心理学系大学教育の未来を探る』(ワークショップ: 話題提供者) 日本グループ・ダイナミクス学会第 60 回大会 2013 年 7 月 北海道札幌市
172. Nishida, K. “Inducing violent attack by cult psychological manipulation: What is ABCD & H?” Annual International Conference of International Cultic Studies Association, Trieste, Italy. (July, 2013).
173. 須田木綿子 『福祉社会学の到達点と課題』 福祉社会学会第 11 回大会 2013 年 6 月 京都府京都市
174. Horike, K. “A cross-generational study on the relationships among sustainable mind, behavior, and well-being.” The Third World Congress on Positive Psychology of International Positive Psychology Association, Los Angeles, California, U.S.A. (June, 2013).
175. Horike, K. “Towards the psychology for the sustainable well-being.” The 13th International Symposium on the Contributions of Psychology to Peace, Kuala Lumpur, Malaysia (June, 2013).
176. 堀毛一也 『モチベーションはポジティブな人生を築く』 日本社会心理学会第 57 回シンポジウム (指定討論) 2013 年 5 月 東京都足立区
177. 戸梶亜紀彦 『感動体験を応用したワークモチベーションの効果的向上について』(公開シンポジウム) 日本社会心理学会第 57 回公開シンポジウム (話題提供) 2013 年 5 月 東京都足立区
178. 谷口尚子・クリス・ウィンクラー 『国際比較・時系列比較可能な政策コーディング法とその応用』 日本選挙学会 2013 年度研究大会 2013 年 5 月 京都府京都市
179. 福岡欣治 『ジャーナリストにおける惨事ストレス対策 — 東日本大震災をふまえて —』 日本トラウマティック・ストレス学会第 12 回大会 シンポジウム (話題提供) 『災害や事件におけるメディアの役割: ト라우マ学の視点から考え

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

る』 2013年5月 東京都豊島区

180. 戸梶亜紀彦 『感謝の対象に関する検討』 日本感情心理学会第21回大会
2013年5月 宮城県仙台市

<研究成果の公開状況>(上記以外)

シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等
ホームページで公開している場合には、URLを記載してください。

<既に実施しているもの>

1. シンポジウム・学会等

1) *成均館大学(韓国) & 東洋大学 HIRC21 共同セミナー

日時：2017年11月3日-4日

テーマ：逆境・共感性・セルフコントロールと適応

企画：崔 訓碩(成均館大学) 安藤 清志(東洋大学)

2) *東洋大学 HIRC21 & ポジティブ心理学研究会共催 研究会

日時：2017年12月9日-10日

【12月9日(土)】 場所：東洋大学白山キャンパス

発表者：菅原大地(筑波大学) タイトル：「ポジティブ心理学と臨床心理学の接点を探る」

特別講演：島井哲志(関西福祉大学) タイトル：「Character strengths を用いた介入に向けて」

【12月10日(日)】 場所：LMJ 東京研修センター

発表者：芳賀道匡(日本大学) タイトル：「学生のソーシャル・キャピタルとウェルビーイングの心理学的研究」

発表者：金子迪大(東洋大学) タイトル：「日々の幸せは持続するか：感情持続研究からの検討」

発表者：鷹阪龍太(東洋大学) タイトル：「適応的な自尊感情を求めて」

発表者：片岡雅知(東京大学) タイトル：「未来の幸せのために今の幸せを犠牲にして本当にいいのか？」

3) *東洋大学 HIRC21 & 成均館大学(韓国) 共同セミナー

日時：2018年1月26日-27日

テーマ：社会生活における逆境と共感性

企画：安藤 清志(東洋大学) 崔 訓碩(成均館大学)

4) 東洋大学 HIRC21 & 翰林大学(韓国) 第7回共同セミナー

日時：2018年2月24日(土)

企画：安藤 清志(東洋大学) 趙 恩慶(翰林大学)

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

- 5) * 産業組織心理学会・東洋大学 HIRC21 共催 シンポジウム
 日時：2016年7月27日
 場所：横浜国際会議場
 テーマ：第31回国際心理学会議 招待シンポジウム
“Job-related stress in natural disasters”
 企画者：安藤清志（東洋大学）・井上果子（横浜国立大学）
 講演者：Elana Newman（米タルサ大学教授・国際トラウマティック・ストレス 学会元会長）
 Cait McMahon（Managing Director of the Dart Centre Asia Pacific）
 堀毛裕子（東北学院大学教授・宮城県臨床心理士会前会長・HIRC21 客員
 研究員）
 高橋尚也（立正大学心理学部准教授）
- 6) * 成均館大学（韓国）・東洋大学 HIRC21 共催 シンポジウム
 日時：2016年7月29日
 場所：横浜国際会議場
 テーマ：第31回国際心理学会議 テーマ・セッション
“Japan-Korea Young Scholar Symposium on Adversity: Similarities,
 Differences, and Synthesis”
 企画者：鷹阪龍太（東洋大学） 徐 正吉（成均館大学）
 話題提供者：
 李 夏妍（成均館大学）
 Consequences of Ostracism in Korea and Japan: A Comparative Study
 金子 迪大（東洋大学）
 The Role of Active Coping and Positive Acceptance in Post-Ostracism
 Responses in Japan
 陸 英善（東洋大学） Differences in cultural display rules between Japan
 and Korea: A Literature Review and Research Propositions
 倉矢 匠（東洋大学） Adversity in the Eyes of the Beholder: Effects of
 Culture-Congruent vs. Culture-Incongruent Displays of Sadness in
 Korea and Japan
- 7) 日本犯罪心理学会・東洋大学 HIRC21 共催 シンポジウム
 日時：2016年9月3日
 場所：東洋大学
 テーマ：これからの犯罪心理学を考える 2 「社会心理学とのクロスロード：反社会的行動と共感性」について
 講演者：Emanuele Castano（New School for Social Research, Professor of
 Psychology）
 尾崎 由佳（東洋大学）
 原田 隆之（目白大学）

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

司会：桐生正幸（東洋大学）

- 8) 日本パーソナリティ心理学会・日本社会心理学会・東洋大学 HIRC21 共催 シンポジウム
 日時：2016年9月15日
 場所：関西大学
 テーマ：「Personality and Physical Health（パーソナリティと身体的健康）」
 講演者：Angelina Sutin 氏（フロリダ州立大学）
 話題提供者：榊原良太氏（鹿児島大学），川本哲也氏（日本学術振興会・慶應義塾大学），
 西田裕紀子氏（国立研究開発法人国立長寿医療研究センター），
 指定討論者：Antonio Terracciano 氏（フロリダ州立大学）
 司会者：堀毛一也氏（東洋大学）
- 9) 翰林大学（韓国）・東洋大学 HIRC21 第6回共同セミナー
 日時：2016年12月9日（金）～2016年12月12日（月）
 場所：International Conference Room, Hallym University, Chuncheon Korea
 企画：李柱一（翰林大学） 安藤清志（東洋大学）
- 10) 日本行動科学学会・東洋大学 HIRC21 共催 シンポジウム
 日時：2017年2月26日
 テーマ：「統合失調症の認知障害」
 講演者：松井 三枝
- 11) 東洋大学 21世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター (HIRC21),
 日仏政治学会共催 シンポジウム
 日時：2016年2月16日（火） 16時～18時
 場所：東洋大学白山キャンパス 6102 教室
 プログラム：『ヨーロッパのレジリエンスー歴史・現在一』
 講演者：
 1. Sylvain Schirmann（ストラスブール大学政治学院）
 2. Jay Rowell（ストラスブール大学・フランス国立科学研究センター）
 討論者：川嶋周一（明治大学）
<http://www.toyo.ac.jp/site/hirc21/91575.html>
- 12) *東洋大学 21世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター (HIRC21)
主催 シンポジウム
 日時：2016年2月18日（木） 14時～17時
 場所：東洋大学白山キャンパス 6102 教室
プログラム：『分断から統合へーストラスブールとフクシマ』
 講演者：

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

1. 鈴木 規子 (東洋大学社会学部)
 2. Sylvain Schirmann (ストラスブール大学政治学院)
 3. Jay Rowell (ストラスブール大学・フランス国立科学研究センター)
 4. 安藤 清志 (東洋大学社会学部)
 5. 菅野 圭祐 (早稲田大学理工学術院)
- 司会・討論者：大島 尚 (東洋大学社会学部)
<http://www.toyo.ac.jp/site/hirc21/91559.html>

1 3) *日本脱カルト協会&東洋大学 HIRC21 共催 招待講演

日時：2015年8月29日(土) 13:00-17:30

場所：立正大学品川キャンパス 11号館

プログラム：カルト問題の今後 自由と人権の未来は？

- ・講演者 元信者の抱える問題 岩野孝之
- ・講演者 カルト信者の家族の苦悩 発表者未定
- ・講演者 信者および家族へのカウンセリングの展開と課題 平野学
- ・講演者 カルト予防対策と市民意識高揚の課題 山口貴士
- ・*講演者 Ms. Catherine Picard フランスのカルト対策：発展と課題：基調講演

講演

<https://www.toyo.ac.jp/site/hirc21/79611.html>

1 4) 翰林大学(韓国) & 東洋大学 HIRC21 第5回日韓共同セミナー

日時：2014年12月20日

場所：東洋大学白山キャンパス 6号館 2階 6202室

プログラム：

講演1 13:10~14:00 Rie, Ju-Il [李 柱一] (翰林大学)

「アクティブエイジングと韓国高齢者の QOL の関係—翰林大学の取り組み」

“Research in Hallym University on the Relationship between Active Ageing and Korean Elderly’s Quality of Life”

講演2 14:00~14:50 Choi, Hoon [崔 纁] (翰林大学)

「アクティブエイジングに向けた社会生活の手段としてのコンピュータゲーム」 “Computer Games as a Way of a Social Life for Active Ageing”

講演3 15:30~16:20 桐生正幸 Masayuki Kiriu (東洋大学)

「日本の高齢者を取り巻く犯罪事情」 “Japanese elderly citizens as victims and perpetrators of crimes.”

講演4 16:20~17:10 安藤清志/堀毛一也 Kiyoshi Ando / Kazuya Horike (東洋大学)

「東日本大震災高齢避難者のウエルビーイング」 “Psychological well-being of the aged evacuees in Fukushima”

大学院生ポスター発表

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

Hong, Rak-Kyeun (洪 榮均)

「注意の瞬きは知覚能力と注意能力いずれの改善によって除去されるか？」“Is removal of attentional blink induced by improvements of perceptual capacity or attentional capacity?”

Lim, Solah (イム ソラ)

「プロアクティブな性格とプロテウスのキャリア志向がアクティブエイジングに及ぼす影響」“Effects of proactive personality and protean career orientation on active aging”

金子迪大 Michihiro Kaneko

「感情順応 / 持続過程の検討」 “Testing affective adaptation/lasting process”

新井田恵美 Emi Niida

「人の視線は男をだまらせる？男性の短期配偶と社会的評判の関係」
“Watchful eyes tame men?: The relationship between men’s short-term mating and social reputation.”

1 5) *グループダイナミクス学会&東洋大学 HIRC21 共催 招待講演

【招待講演 1】 第 61 回大会 1 日目 (9 月 6 日) 13:45-15:15

It Takes Two Hands to Clap: Collectivistic Independence Promotes Group Creativity
講演者 Hoon-Seok Choi (Sungkyunkwan University, Republic of Korea)

【招待講演 2】 第 61 回大会 1 日目 (9 月 6 日) 16:00-17:30

社会心理学と平和構築：大量虐殺後のルワンダにおける和解と癒しの試み
講演者 南 昌廣 (ブリティッシュコロンビア大学/PFR-森田平和和解研究所)

【招待講演 3】 第 61 回大会 2 日目 (9 月 7 日) 10:00-11:30

On the Usefulness of Experience-Sampling for the Understanding of Self-control, Morality, and Power in Daily Life
講演者 Wilhelm Hofmann (University of Cologne)

1 6) *グループダイナミクス学会&東洋大学 HIRC21 共催 日韓若手研究者インタラクションプログラム

【特別ワークショップ】 第 61 回大会 2 日目 (9 月 7 日) 13:00-15:00

個人と集団のダイナミクス

話題提供者 Hyun Euh (成均館大学)

話題提供者 Jeong Gil Seo (成均館大学)

話題提供者 井上裕珠 (一橋大学)

話題提供者 鷹阪龍太 (東洋大学)

1 7) 災害救援者の惨事ストレスシンポジウム

日時：2014 年 1 月 12 日 (日) 13:30-16:40

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

場所：東洋大学 白山キャンパス 6号館 1階 6101 教室（東京都文京区）

プログラム：

13:30-15:00 第1部 基調講演

「災害救援者・支援者のこころ：東日本大震災後の社会的課題」

講演者：重村 淳（防衛医科大学校 精神科学講座）

15:10-16:40 第2部 科学研究費補助金による助成研究成果発表 消防職員の惨事ストレス

講演者：松井豊（筑波大学人間系）；研究全体説明

兪 善英（筑波大学人間総合科学研究科）；東日本大震災緊急消防援助隊調

査

Hyesun Joo（梨花女子大学校社会科学大学心理学科）；韓国消防職員調査

指定討論：重村 淳（防衛医科大学校 精神科学講座）

18) 第4回東洋大学 HIRC21&翰林大学応用心理研究所共同セミナー

日時：2013年12月14日（土）13:30～18:00

場所：翰林大学応用心理研究所

プログラム：

Session 1

Takashi Kakuyama (Tokyo Future University)

“The Activity of Japanese Association of Industrial and Organizational Psychology (JAIOP)”

Akihiko Tokaji (Toyo University)

“The interpersonal Factors Affecting the Motivation at Work”

Yeonwook Kang (Hallym University)

“Cognitive Ageing and Dementia”

Session 2

Takashi Ohshima (Toyo University)

“Volunteering in Social Dilemmas”

Hoon Choi (Hallym University)

“Long-Lasting Elimination of Attentional Blink Through Training”

Poster presentations & graduate students' interactions

(2 posters by Toyo University & 2 posters by Hallym University)

2. 講演会

1)

日時：2016年2月24日

講師：黄昭淵（江原大学人文学部）

* テーマ：「近代日本の文学者が経験した逆境、および小説に描かれた逆境—韓国人の立場から—」

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

企画：安藤清志（東洋大学）

2)

日時：2014年10月10日

講師：安藤清志

テーマ：原発被災の心理的影響—浪江町・県内避難住民の方々を対象にしたアンケート調査の結果から

企画：第4回 浪江町復興まちづくり協議会

3)

日時：2014年10月10日

講師：内田由紀子氏（京都大学・准教授）

テーマ：文化と幸福：ソーシャル・キャピタルとの関連

企画：堀毛一也

4)

日時：2014年2月22日

講師：安藤清志

テーマ：災害における「喪失」と社会 ～ill-beingからwell-beingへ

企画：東京未来大学モチベーション研究所第3回フォーラム

3. 研究会

1) 成均館大学（韓国）&東洋大学 HIRC21 共同研究会

日時：2016年3月13日-16日

テーマ：社会的逆境における感情表出と社会低排斥の日韓比較

企画：安藤清志（東洋大学） 崔訓碩（成均館大学校）

日時：2015年9月25日-28日

テーマ：社会的逆境における感情表出と社会低排斥の日韓比較

企画：安藤清志（東洋大学） 崔訓碩（成均館大学校）

日時：2015年5月22日-25日

テーマ：社会的逆境における感情表出と社会低排斥の日韓比較

企画：安藤清志（東洋大学） 崔訓碩（成均館大学校）

2) 東洋大学&HIRC21 共同研究会

日時：2014年3月7日-11日

テーマ：韓国人における社会的逆境の種類や頻度、精神的回復の程度

企画：安藤清志（東洋大学） 李柱一（翰林大学）

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

3) 社会行動研究会&東洋大学 HIRC21 共催 研究会

【第 183 回】 2017 年 1 2 月 2 日 (土) 15:00~18:00

【タイトル】ビッグデータからスマートデータへの移行と謙虚さ (Humility) の重要性

【発表者】ニール・シーマン (RIWI 社 CEO)

【タイトル】インターネットリサーチの学術利用についての現状と留意点

【発表者】小野沢 輝道 (株式会社クロス・マーケティング)

【第 182 回】 2017 年 7 月 1 日 (土) 16:30~17:30

【タイトル】社会行動の多様性と遺伝と環境のかかわり

【発表者】野村 理郎 先生 (京都大学大学院教育学研究科)

【第 181 回】 2017 年 5 月 2 7 日 (土) 16:30~17:30

【タイトル】時間的および社会的自己制御における社会・文化環境の影響

【発表者】石井敬子 先生 (神戸大学大学院人文学研究科)

【第 180 回】 2017 年 1 月 7 日 (土) 16:30 -17:30

発表者 1: 杉谷 陽子 (上智大学)

タイトル: The Role of Self-based and Public-based Evaluation on Brand Attitudes:
A Comparison between Japanese
and American Consumers

【第 179 回】 2016 年 12 月 3 日 (土) 15:00 -17:30

発表者 1: 小塩 真司 (早稲田大学文学学術院)

タイトル: ポジティブなパーソナリティ概念とその周辺

発表者 2: 鷹阪 龍太 (東洋大学大学院)

タイトル: 社会的排斥の影響を調整する文化的要因の検討-日韓比較を通して

【第 178 回】 2016 年 9 月 5 日 (月) 15:00 -16:30

発表者 1: Emanuele Castano (The New School for Social Research, New York City)

タイトル: It Really is About 'Literary' Fiction: New Evidence and Underlying
Mechanisms for the Literary Fiction
Effect on Theory of Mind

【第 177 回】 2016 年 7 月 2 日 (土) 15:30 -17:40

発表者 1: 原 朋弘 (東京大学大学院)

タイトル: メディアがマイノリティーに対する社会的選好に与える影響-在日コリアン
と日本人学生を

対象にした経済実験

発表者 2: 會田 剛史 (政策研究大学院大学)

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

タイトル：Social Capital as an Instrument for Common Pool Resource Management:
A Case Study of Irrigation

Management in Sri Lanka

【第 176 回】 2016 年 5 月 14 日 (土) 15:00 -17:30

発表者 1：雨宮 有里 (神奈川大学)

タイトル：抑うつが意図的・無意図的想起に与える影響—経験サンプリング法を用いて

発表者 2：齋藤 梓 (目白大学)

タイトル：性被害者の被害後の治療選択と精神的回復、および被害時の心理

【第 175 回】 2016 年 2 月 22 日 (月) 15:30-18:00

発表者 1：竹橋洋毅 (東京未来大学)

タイトル：「困難に挑む心の理学」

発表者 2：小林麻衣 (東洋大学)

タイトル：「自我消耗するとズルしやすいのか？—自我消耗が不正行為に及ぼす影響の検討—」

【第 174 回】 2015 年 12 月 26 日 (土) 15:00-17:30

発表者 1：高史明 (神奈川大学)

タイトル：「在日コリアンへのレイシズムとインターネット」

発表者 2：田戸岡好香 (東京大学)

タイトル：「専業主夫のイメージの検討：専業主婦およびキャリア男性との比較から」

【第 173 回】 2015 年 10 月 24 日 (土) 16:00—17:30

発表者：大久保暢俊 (東洋大学人間科学総合研究所)

タイトル：社会的比較における第三者の影響

【第 172 回】 2015 年 8 月 25 日 (火) 15:00—17:30

発表者 1：蔵永 瞳 (就実短期大学)

タイトル：感謝されると親切になる？—感謝表出が受け手に及ぼす影響—

発表者 2：田渕 恵 (関西学院大学)

タイトル：「高齢者の知恵の伝授と若者の感謝—制御焦点理論を用いた実験的検討—

【第 171 回】 2015 年 6 月 27 日 (土) 16:00—17:30

発表者：八城 薫 (大妻女子大学)

タイトル：大学生の余暇活動が well-being に及ぼす影響

【第 170 回】 2015 年 4 月 25 日 (土) 16:30~18:00

発表者：武田美亜 (青山学院女子短期大学)

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

タイトル：親子間の透明性錯覚：娘と父母の関係を用いた検討

【第 169 回】 2 月 21 日 (土) 15:00-18:00

「ユニークな名前は増加しているか？日本文化における個性追求と個人主義化」

発表者 荻原祐二 (京都大学)

「文化の単位と心・文化の相互構成—地域住民の信頼に焦点を当てた社会調査—」

発表者 福島慎太郎 (京都大学)

【第 168 回】 12 月 12 日 (金) 15:30-18:00

「霊長類における行動のプランニングおよび実行の神経メカニズム」

発表者 中山義久 (公益財団法人東京都医学総合研究所 前頭葉機能プロジェクト)

「他者の感覚、情動を推測するミラーメカニズム」

発表者 石田裕昭 (公益財団法人東京都医学総合研究所 前頭葉機能プロジェクト)

【第 167 回】 10 月 25 日 (土) 15:00-18:00

「自由意志信念の概念的フレームワーク」

発表者 渡辺 匠 (東京大学)

「犯罪被害者のための正義：新しい司法制度の効果測定」

発表者 白岩祐子 (東京大学)

「勢力感が人々の罰や許しの動機づけに与える影響」

発表者 橋本剛明 先生 (東京大学)

【第 166 回】 8 月 18 日 (月) 11:00-18:00

「マルチレベルモデリング講習会」

発表者 清水裕士 (広島大学大学院総合科学研究科 助教)

【第 165 回】 2014 年 8 月 8 日 (金) 15:00-18:00

「誰かのためにがんばる自分—他者志向性が課題への内発的動機づけに及ぼす影響」

発表者 村田光二 (一橋大学)

「資源の分割容易性と分配への期待が妬みに及ぼす影響」

発表者 井上裕珠 (一橋大学大学院)

【第 164 回】 2014 年 6 月 7 日 (土) 16:00-17:30

「日本における犯罪心理学の現在と今後」

発表者 桐生正幸 (東洋大学)

【第 163 回】 2014 年 4 月 26 日 (土) 16:00-17:30

「自己高揚と自己卑下：モチベーション維持戦略という視点から」

発表者 尾崎由佳 (東洋大学)

【第 162 回】 2014 年 2 月 28 日 (金) 16:00-17:30

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

「制度としての文化」

発表者 山岸俊男 (東京大学)

4) 社会心理学研究会・東洋大学 HIRC21 共催 研究会

日時：2017年2月11日

場所：LMJ 東京研修センター

発表者：松井 豊 (筑波大学人間系), 藤田 浩之 (日本放送協会), 小林 麻衣子 (明治大学),

高橋 幸子 (東洋大学 HIRC21), 仲嶺 真 (筑波大学人間総合科学研究科)

タイトル：地下鉄サリン事件被害者・家族の心理――化学兵器テロの残酷さ

<これから実施する予定のもの>

なし

14 その他の研究成果等

--

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

15 「選定時」及び「中間評価時」に付された留意事項及び対応

<「選定時」に付された留意事項>

なし。

<「選定時」に付された留意事項への対応>

該当しない。

<「中間評価時」に付された留意事項>

なし。

<「中間評価時」に付された留意事項への対応>

該当しない。

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

16 施設・装置・設備・研究費の支出状況(実績概要)

(千円)

年度・区分	支出額	内 記						備考
		法人負担	私学助成	共同研究機関負担	受託研究等	寄付金	その他()	
平成25年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	12,600	7,690	4,910				
平成26年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	15,853	10,864	4,989				
平成27年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	15,319	8,528	6,791				
平成28年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	15,411	9,849	5,562				
平成29年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	14,487	10,368	4,119				
総額	施設	0	0	0	0	0	0	
	装置	0	0	0	0	0	0	
	設備	0	0	0	0	0	0	
	研究費	73,670	47,299	26,371	0	0	0	
総計	73,670	47,299	26,371	0	0	0		

法人番号	131070
------	--------

17 施設・装置・設備の整備状況（私学助成を受けたものはすべて記載してください。）
 《施設》（私学助成を受けていないものも含め、使用している施設をすべて記載してください。）（千円）

施設の名 称	整備年度	研究施設面積	研究室等数	使用者数	事業経費	補助金額	補助主体
21世紀ヒューマン・イ ンタラクシオン・リサー チ・センター	25	32㎡	1	23		0	0

※ 私学助成による補助事業として行った新增築により、整備前と比較して増加した面積

_____㎡

《装置・設備》（私学助成を受けていないものは、主なもののみを記載してください。）（千円）

装置・設備の名 称	整備年度	型 番	台 数	稼働時間数	事業経費	補助金額	補助主体
(研究装置)				h			
				h			
				h			
(研究設備)				h			
				h			
				h			
(情報処理関係設備)				h			
				h			
				h			

18 研究費の支出状況（千円）

年 度	平成 25 年度	積 算 内 訳		
小 科 目	支 出 額	主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消 耗 品 費	1,083	研究資料複写、消耗品	1,083	OA用品、複写料等
図書資料費	301	書籍代	301	研究関連書籍・資料
会合費	41	シンポジウムに伴う経費	41	弁当、お茶、シンポジウム懇親会
通信運搬費	27	郵送、宅配便	27	資料発送(切手、レターパック、ヤマト便)
印刷製本費	362	印刷・製本	362	研究年報作成
旅費交通費	2,935	海外旅費・国内旅費	2,935	調査・研究・学会参加、海外研究者招聘
報酬・委託料	4,900	業務委託・依頼による支払	4,900	web調査業務委託、通訳・翻訳、講演謝金
(その他)	258	学会参加費	258	学会参加費
計	9,907		9,907	
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人件費支出 (兼務職員)	196	研究・センター運営補助	196	時給900円、年間時間数 約217時間 実人数 4人
教育研究経費支出				
計	196		196	
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教育研究用機器備品	1,320	教育研究用機器備品費	1,320	パソコン、プロジェクター
図 書				
計	1,320		1,320	
研 究 ス タ ッ プ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント	529	研究補助	529	学内2人
ポスト・ドクター	648	研究補助	648	学外1人
研究支援推進経費				
計	1,177		1,177	

法人番号

131070

年 度	平成 26 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	997	研究資料複写、消耗品	997
図 書 資 料 費	566	書籍代	566
会 合 費	155	シンポジウムに伴う経費	155
通 信 運 搬 費	18	郵送、宅配便	18
印 刷 製 本 費	1,148	印刷・製本	1,148
旅 費 交 通 費	3,849	海外旅費・国内旅費	3,849
報 酬 ・ 委 託 料	6,471	業務委託・依頼による支払	6,471
(その他)	156	学会参加費	156
計	13,360		13,360
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)	563	研究補助等	563
教育研究経費支出			
計	563		563
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品	446	教育研究用機器備品費	446
図 書			
計	446		446
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	130	研究補助	130
ポスト・ドクター	1,354	研究補助	1,354
研究支援推進経費			
計	1,484		1,484

年 度	平成 27 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	688	研究資料複写、消耗品	688
図 書 資 料 費	721	書籍代	721
会 合 費	198	シンポジウムに伴う経費	198
通 信 運 搬 費	103	郵送、宅配便	103
印 刷 製 本 費	367	印刷・製本	367
旅 費 交 通 費	2,778	海外旅費・国内旅費	2,778
報 酬 ・ 委 託 料	3,064	業務委託・依頼による支払	3,064
(その他)	95	学会参加費、使用料等	95
計	8,014		8,014
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)	1,090	研究補助等	1,090
教育研究経費支出			
計	1,090		1,090
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品	3,132	教育研究用機器備品費	3,132
図 書			
計	3,132		3,132
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	2,192	研究補助	2,192
ポスト・ドクター	891	研究補助	891
研究支援推進経費			
計	3,083		3,083

法人番号

131070

年 度		平成 28 年度	
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	1,618	研究資料複写、消耗品	1,618
図 書 資 料 費	1,635	書籍代	1,635
会 合 費	82	シンポジウムに伴う経費	82
通 信 運 搬 費	74	郵送、宅配便	74
印 刷 製 本 費	409	印刷・製本	409
旅 費 交 通 費	2,527	海外旅費・国内旅費	2,527
報 酬 ・ 委 託 料	3,702	業務委託・依頼による支払	3,702
(その他)	775	学会参加費、使用料等	775
計	10,822		10,822
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)	105	研究補助等	105
教育研究経費支出			
計	105		105
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品	752	教育研究用機器備品費	752
図 書			
計	752		752
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	838	研究補助	838
ポスト・ドクター	2,894	研究補助	2,894
研究支援推進経費			
計	3,732		3,732

年 度		平成 29 年度	
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	834	研究資料複写、消耗品	834
図 書 資 料 費	487	書籍代	487
会 合 費	169	シンポジウムに伴う経費	169
通 信 運 搬 費	103	郵送、宅配便	103
印 刷 製 本 費	1,393	印刷・製本	1,393
旅 費 交 通 費	5,023	海外旅費・国内旅費	5,023
報 酬 ・ 委 託 料	1,180	業務委託・依頼による支払	1,180
(その他)	363	学会参加費	363
計	9,552		9,552
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)	63	研究補助等	63
教育研究経費支出			
計	63		63
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品	216	教育研究用機器備品費	216
図 書			
計	216		216
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	3,770	研究補助	3,770
ポスト・ドクター	886	研究補助	886
研究支援推進経費			
計	4,656		4,656